湖南史学の特徴と形成

高　木　智　見*

はじめに
第一章　対象論
　　中国と日本の過去・現在・将来
　　学問の方法論
　　湖南自身
第二章　史料論
　　疑古
　　釈古の一
　　釈古の二
　　釈古の三
第三章　認識論
　　変化の思想
　　異文化理解
　　眼は冷たく心は熱く
第四章　表現論
　　象徴主義
　　設身処地・紀事本末体
　　時代精神の直観
おわりに

はじめに

「博雅通達」あるいは「博大精深」なる語は、まさに湖南のような人物の学問を形容するためにこそ存在すると言っても、異論はあるまい。湖南が崇仰した章学誠は、劉知幾のいわゆる史家の三要件である才、学、識の「三長」を敷衍して、「義理は識に存し、辞章は才に存し、徴実は学に存す」（『文史通義』説林）と述べ、さらにその識から生ずる史徳について、「著書者之心術」、すなわち史書を著述する際に持つべき公正な心的態度であるとした（『同』史徳）。このように章学誠は、三長に加えて史徳を兼ね備える記述を理想としたのであったが、湖南の

＊ 山口大学人文学部教授

手になる文章を読めば、それらがいかなるものであるのかを如実に感得することができる。すなわち湖南の諸作品に正面から向き合う者は誰もが、その奥行きが深く含蓄のある文章（才）に、また、精通と博捜を前提とする鮮やかな史料操作（学）に、さらにまた、前人の未発を発する独創的な見解（識）に、それに加えて、個別事象を全体の中に位置づけたうえで直観的に理解する能力（史徳）に驚嘆することになる。

こうした湖南史学に対して、その全体像と到達点を客観的に明らかにして評価する作業が必要なことは言うまでもない。事実、そうした研究が着実に積み重ねられてきている。しかし、その一方、今なお学術的な価値の減ずることない諸作品を、湖南がいかにして生み出したのかを探り、それを通じて、湖南史学の方法論における精華を自らの歴史研究の糧とする、といった作業も、それに劣らず重要であると考えられる。

確かに、ひとたび全集の巨冊一四巻を前にすれば、あたかも孔子に対して、「これを仰げばいよいよ高く……これに従わんと欲しても、由なきのみ」（『論語』子罕）、と顔回が慨嘆したように、誰もが、その遠大かつ深遠な内容に近づきがたいとの思いを抱くであろう。実際、後述の如く、かつて宮崎市定も、内藤史学の到達した結果を自己のものとして利用することは誰にでも出来るが、内藤史学のやり方を真似るのはむつかしい、と述べている。しかし客観的に見れば、孔子が政治に挫折した一介の下級貴族であったのと同様、湖南もまた一四〇年前に生をうけた一個の人間、一人の研究者であるにすぎず、湖南史学の方法論における特徴を明らかにしたうえで、それを吸収し自己の研究の糧とすることは可能であるはずである。周知の如く、湖南自らが、先哲の学問や著書を貪欲に精読・吸収して自らの学問を鍛え上げた体験を、多くの文章として書き残している。それらを読めば直ちに分かるように、湖南が最も留意したのは、先哲の学問研究の方法を自らのものとすることであった。本稿の目的は、まさにそうした湖南にならい、湖南史学の方法論を明確にしたうえで学び取ることである。

そこで、先学の湖南に対する評価の中から、湖南史学の方法論についての認識を深めることができるような記述を見ておきたい。まず湖南の同世代にして同僚で、その学問の最良の理解者であったと考えられる狩野直喜は、追悼文「内藤君を偲んで」（『読書篘餘』みすず書房、一九八〇年）において、「非常に博覧強記な透徹明敏な人であつた。……単に物事を知つて居るといふのではない。そこに一貫した主張があつた。決して雑学者ではなかつた。種々な知識はすべて専門の史学の為めになるやう活用されて居つた、君は晩年中国の史学史を講じて居られたと聞くが、此れなどは昔流の所謂漢学者の如く史類の書丈を読んで、それを基礎として中国史をやる人には出来ぬ芸である。君の如き博大な学問の人にして初めて出来ることと思ふ」と述べ、非常なる博学が歴史学に収斂し、そこには一貫した主張があったと総括している。

また小島祐馬「学究生活を顧みて」（『思想』一九五三年三号）は、「博通深造の学者で、その学風は清朝風の実証主義を基礎とせられていたが、その規模は雄大で、日本人や西洋人の説でも、勝れたものはみなこれを取つて自家薬籠中のものとせられていた……学問上の天才とい

つた方であつた」とし、曽我部静雄「内藤湖南先生の思出」（『湖南博士と伍一大人』生誕百年記念祭実行委員会、一九六五年）は、「常人とは異なる旺盛な記憶力を持たれ、また常人とは異なった、ものを纏める才能を持たれていたから、見たり、聞いたり、読んだりしたものは、一つ一つ整然と脳裡に蔵められていたようである。従って事に当たれば、その都度必要な知識が、頭の中からよどむことなく流れ出て、つきるところがなかったのである」と述べ、やはり湖南の学問の本質として、大量の知識を網羅･収斂する天才を認めている。さらに武内義雄「湖南先生の追憶」（『支那学』七巻三号）は、「先生は緻密な考証に長じて居られて、該博な知識が縦横自在に利用されているが、先生の研究には考証以上更に大きなものがある」としている。武内氏が言う「大きなものがある」とは、その文脈からすれば、湖南が朱子に対して、「古書を取扱ふに当つて書物によまれずに紙背に徹する眼光を持つていた」、と評価した語に見える眼光なるものを、当の湖南自身も有していたという意味である。

以上に列挙したように、礼賛に近いやや抽象的な評価が多いなか、宮崎市定は、より客観的分析的に湖南の学問を評価している。宮崎は、湖南史学の独創的な方法について、「博士の研究発表には、余人に見られるような博引傍証はほとんど現われていない場合が多い。博士が理想としたのは、むしろなるべく僅少の史料を用いて断定し、思考の最短距離をとって結論に到達するにあった。この点は、清朝考証学者の発想法と相通ずるものがある。……非常に多くの資料を集めても、その中の一番有効な資料を一つ使えばそれで十分だと考えた」（「独創的なシナ学者内藤湖南博士」宮崎全集二四巻）と記している。

さらに湖南の歴史認識の特色については、次のように言う。「歴史学は物事の核心に迫る学問である。それにはいろいろな方法があるが、内藤博士のやり方は、いっさいの附随的、二次的なもろもろを捨て去り、直観的な閃きで、ずばりと根本のところを把握してしまう。これは他人が意識して真似しようと思っても真似られない、先生独特の芸当である。……内藤史学はすぐれて立体的である。中国から日本を見る、とまた日本から中国を見直し、政治から文学を見、文学から絵画を見、再び芸術から政治を見る。近世から古代を見、また古代から近世を見る。いろいろ違った立場から、くまなく観察した上で映像を組み立てるから、それは自然に立体的に構築されるのである。……内藤史学は最後は史学となって結実したが、それまでに多彩な雑学と実践とがあった。だから内藤史学を理解するためには、その歴史学の部分だけを読んだのでは十分でない。……内藤史学のやり方を真似るのはむつかしいが、内藤史学の到達した結果を自己のものとして利用することは誰にでも出来ることなのである」（「『内藤湖南全集』刊行に寄せて」、同上）。このように宮崎は、湖南の歴史認識が、独自の直観的把握に基づくこと、しかもそれが、多角的複眼的視点からの観察によって構成される「立体的な」理解であること、を指摘する。

上引の如く宮崎は、湖南史学の理解には、史学関係以外の著作を読む必要があり、湖南史学は利用はできるが真似はできない、としている。「やり方を真似るのはむつかしい」ことに関

して、宮崎は「内藤史学の真価」(『内藤湖南全集』巻八月報三、同上)という文章において、先輩・藤田元春との対話を回憶し、「桑原さんの学問は頑張れば追いつけるだろうが、内藤さんに追いつくのはむつかしいぞ」と言ってくれたが、そのうちに「内藤さんの学問はありゃ学問じゃないぜ。やっぱり桑原さんの方がいいぞ」と言い出した。私の聞いたのはここまでだが、その後また説が変ってきたそうだ、と記している。また「『アジア史研究』第一はしがき」(同上)では、「もちろん内藤湖南博士は私の恩師であるという以上に、及び難い大家としても尊敬するが、私の研究しているのは歴史学自体であって、それ以外の何物でもない。だから良いものは採り、不足なものは補い、納得せぬ所は改める。もっぱら客観的に事物を考察しようとし、史料を徹底的に読み抜くことを期する点では、私のやり方は寧ろ桑原博士に近いかも知れない」として、湖南の学問に尋常の歴史学を超えた天才的な資質を認めたうえで、それは客観的考察と徹底的な史料理解を主眼とする自らの学問とは、一定の距離があることを認めている。

湖南史学を熟知した人々による如上の評価や指摘は、湖南史学全体に通底する方法や精神を知るうえでは、極めて示唆的かつ啓発的である。しかし、それぞれの執筆意図からすれば当然であるとも言えようが、湖南の方法論を自らの糧として吸収するという点では、大いに物足りない。方向性は感得できるが、具体性の面で欠ける。本稿では、次のような考えに基づき、湖南史学の研究法を四段階に分け、それぞれの特徴を明らかにしてみたい。

おおよそ、歴史研究という作業は、最初に研究対象を設定し、次いで関連史料を網羅し、さらに、それらを解読・分析・考察し、最終的に、一連の作業の経過ならびに結論を表現するという手順で行われる。いま、こうした手順を、それぞれ対象設定、史料選択、歴史認識、歴史叙述と呼ぶことにする。当然のことながら、研究者は自らの研究を遂行する過程で、これら各段階において求められる個別の作業を、自らの考え方と技量(方法、方針、観点、世界観)によって果たしていく。

この点は、天才湖南と雖も我々と変わらないはずであり、論証不要とも思われるが、念のために確認しておきたい。とはいえ、残念ながら湖南には、史学概論・史学研究法といった類の著述はないため、同時代に広く読まれていた史学研究法を一瞥することで確認作業に替えたい。たとえば田崎仁義『一般経済史』序論(甲文堂書店、一九三四年)は、昭和初期における一般的な史学概論の書である坪井九馬三『史学研究法』(早稲田大学出版部、一九〇三年)、内田銀蔵『史学理論』(同文館、一九二二年)、大類伸『史学概論』(共立社書店、一九三二年)、ベルンハイム『歴史とは何ぞや』(原著一九二〇年刊行、岩波文庫、一九三五年)などを参考にして、経済史の研究法の「要領」を以下の如く極めて簡潔に述べている。

> 先づ研究せんとする問題を決し、次で該問題に関係ある経済事象の史的資料を、成可く広博に之を蒐集し、而して其の資料としての価値を周到に考察判定し、之を其の価値によ

りて証拠に供し、斯くして提供せられたる多数の証拠を基礎として、史学的に考証し、経済学的に観察し、分析し、解明し、或は比較し、概括し、総合し、帰納し、以て個々より全般に進み、又は推理し、演繹して個々より他の個々、或は全般に及ぼし、依つて以て、事象の生滅、経過の真相を記叙表現すると共に、其の因果の所以を尋究し、進化の理法を顕彰するにある（同書一一頁）。

この一文には、記載内容から考えて、「経済史」という限定は殆ど考慮する必要がなく、昭和初年における歴史研究一般の手順が述べられていると見てよい。今の時点で一読すれば、最末尾の「進化の理法を顕彰する」云々については、さすがに些かの違和感を覚えるが、その一点を除き、当時における歴史研究の手順は基本的に現在と同じであったと判断できよう。また湖南の論著から類推される手順も、この判断と齟齬することはなく、あの膨大な業績も、こうした研究の手順によって生み出されたと考えてよい。

そこで以下、研究者湖南の各段階における考え方や技量を、対象論、史料論、認識論、表現論の語で呼び、それぞれ一章を立てて、特徴を明らかにする。そのうえで、湖南がそうした考え方や技量を如何にして獲得したのかを明確にして、湖南史学の方法論を吸収・体得するための足掛かりとしたい。

ちなみに、湖南には、全集未収論文として「漢学新法」（『小天地』一巻三号、明治三三年、『書論』一四号所収）なる一文があり、漢学の門径について解説している。ただし、この文章は序論であり、本論として、経史子集に関する「新法」を説くことを意図し、次号では「史学研究の目的を主として、読書法を言ふつもりである」との予告までなされているが、惜しいことに、杉村邦彦氏によれば、その計画は中断されたという。

さらに一言すれば、湖南が、よりよい学問研究の方法論を常に模索していたことは、学者門径の書について「晩年に至るまで絶へず意を用ひられ」（小島祐馬「湖南先生の『燕山楚水』」、『支那学』七巻三号、一九三四年）たことからも想像できる。実際、湖南は市野迷庵の経学入門書『読書指南』を、「樸学の根本を提唱し、漢唐の体例ことごとく備わる。叙述簡約にして、初学の士、以て津梁と為すべし」と高く評価して、市野の門人であった渋江抽斎の手稿本に小島祐馬とともに編集を加え、没後一年目の一九三五年の刊行にこぎつけている（弘文堂刊同書末尾の小島祐馬跋文）。

章を改めて本論へと進むに先立ち、つぎの二点を断っておきたい。第一は、湖南の方法論を四段階に分けて論ずることが、天才的あるいは直観的と形容される湖南の学問およびその方法を矮小化することにつながるという懸念についてである。如上の先学による指摘のように、湖南の学問は、個別事象を全体の中に位置づけて直観的に理解することを旨とする。すなわち議論の対象は断片であっても、全体像を提示するというのが、湖南の学問である。したがって、湖南の方法論を分解して考えることは、湖南に即して湖南を理解することにはならないとも言

える。しかし、湖南史学の研究法を、後学の誰もが共有できるものにするためには、分解もまた、やむを得ない不可避の接近法であると考える。というのも、やや主観的な物言いをすれば、湖南の文章は、読む側の探求心や力量に応じ見えてくるものが異なり、読む側に具体的に求めるものが無ければ、何も応えてくれない、という傾向が強いからである。そのうえ湖南の学問は幅広く、全体像を掴むことが困難であるばかりでなく、しばしば文脈や話題から離れて、重要なことを語り、記すことがあり、常に一定の目的意識を持って臨むことが不可欠であると考えられるからである。

いずれにしても、湖南の学問に対する理解が今なお充全とは言えず、外在的な理解に基づく批判すら存在する理由の一つは、これら四段階の方法論の一部に対する理解を以て、湖南の学問全体の評価につなげている、ということが考えられる。たとえば、『支那論』緒言に見える「支那人に代わって支那の為めに考」えるという語が、独り歩きして、湖南の中国に対する態度が侵略的であったという言説を目にすることがあるが、湖南のこの発言は、後述の如く、他者の尺度で他者を理解するという「認識論」を湖南自らが表明しているのであって、この発言から認識対象としての中国に対する湖南の考え方を読み取ることは、『支那論』緒言における文脈上、完全な誤読である。湖南の主張を湖南に即して理解せず、読み取る側の先入観によって理解しているにすぎない。

第二は、ほぼ二〇年にわたる新聞記者時代の著述と、やはりほぼ二〇年の大学における研究者時代の著述を一括して同等に扱うことについてである。この点は、湖南と現実政治との関係、さらにはより一般化して研究者における学問と現実の関係など、波及・関連する面が大きく、容易には論じ難い。本稿では、湖南の四〇年以上にわたる著述は、全て湖南自身の歴史認識の反映として同じ扱いをすべきであると考えて論をなしたが、その理由を述べておきたい。

歴史研究者湖南にとって新聞記者時代がいかなる意味を有するのかについては、狩野直喜が湖南自身の「自分は若い時分から新聞記者をした……その為無駄な余計な本を読んだ、それが今となつて見ると何かの役に立つて居るように思われる」という述懐を紹介しつつ、「普通の学歴のものは学生の時分から余計な本を読む機会もなく早く専門家になるから益々余計な本を読む暇がない。内藤君は永らく新聞界に居つたから早く職業的専門家にならず、余計な本を読み八面に知識を渟蓄(ていちく)して、大学へ入らるるに及びそれを君の史学の上に利用された」と記している（前引書、一九一頁）。湖南、狩野いずれも、記者時代の読書範囲の広さこそが、湖南の深遠な歴史学を形成したと述べている。

確かにその通りに違いなかろうが、よくよく考えれば、新聞と歴史は、本来、極めて近い関係にある。この点については、たとえば湖南とともに「京都文化史学」を創成し、湖南にも少なからず影響を与えたとされる内田銀蔵が、その著『史学理論』（同文館、大正一一年）において、「新聞紙は現在の歴史であつて、歴史は過去の新聞紙である」という考え方は、大体において不可はない、と述べている。なんとなれば、新聞は「主として日々新たに発生する事件

を伝へ、人事の発展、社会の進化の最近の模様を写し出す……この点に於て……実は記録としての歴史の性質を具えて居る」。したがって、歴史の研究者に求められる「冷静な頭脳、透徹なる達観の力」は、新聞記者にも同じく必要な資格であり、

> 新聞記者が日々新たに発生し来る事実に関し色々材料を集めそれを鑑別し、取捨し、それを纏めるといふ仕事を為すに当たりては、一般に歴史の研究に用いるやうな方法を自然と使用する訳になります……新聞記者に歴史の知識が必要であるといふことは、能く認められて居ります。其の重もなる理由は、今日の状態を正当に理解し、当今の世務を適切に論議するには、過去の事実、是迄の発展の成り行きを能く知つて居ることが肝要であるといふ点にある（同上、一四三頁）。

としている。このように新聞記者と歴史研究者の共通性を極めて説得的に説いているが、内田と湖南の関係から考えて、この文章を執筆した内田の脳裡に、新聞記者出身の歴史家である湖南の存在がなかったとは言えないであろう。

ちなみに繆雨『史記与新聞学』（新華出版社、二〇〇〇年）は、四十年近くの記者生活を経験した著者が、『史記』を新聞学の観点から分析した興味深い書物であり、書中、歴史と新聞の関係について、やはり極めて示唆的な発言をしている。

> 新聞記者は毎日、常に歴史の最も新たなページを記録している。新たに発生する種々の事柄を報道するためには、歴史家が歴史的事実を叙述するのと同様、選択と評価の作業が伴う。そうした選択や評価は、ともに記者自身の世界観によって導かれる。記者の世界観は取材から報道に至る一切の活動を規定し、それは彼の作品としての新聞記事に反映することになる。読者は記事やその行間から、新聞報道が客観的であるか否か、展望卓識を具えているか否かを読み取ることができる。
>
> 新聞記者が時代の動向・変化を観察して、歴史が前進する足取りを記録するためには、まず眼力が求められる。とりわけ哲学的な頭脳と歴史的な眼光が求められる。この点は、歴史家に「史識」が必要であるのと同じである。異なるのは、新聞報道では、時間という要素がより濃厚であるという点である。すなわち、複雑を極める社会現象や、事態の風雲変化の成り行きに関して、歴史家は時間による濾過を待ち、霧がはれ煙がひき、塵や埃が鎮まった後、ゆっくりと記述することができる。これに対して、新聞記者は、現場で観察、判断し、瞬時に考慮して、報道しなければならない。この点で、より一層明晰な頭脳と鋭い眼光が求められ、科学的な世界観と方法論を身につけることが必要である（同書、九七頁）。

要するに、新聞記事と歴史叙述はともに同じく、歴史的な観点から対象を観察・認識した結果を表現したものなのである。湖南もまた、このことを新聞記者時代にすでに明確に自覚していた。たとえば三五才の時点で『大阪朝日新聞』に掲載した「刺客の害より大なる者」（全集三巻、二三二頁）において、新聞の役割に関して次のように述べている。

> 責立言に在ること、新聞紙の若き者は、其の国家社会の得失に於けるや、独り其の外形に表見せる者を議するに止まらずして、而して更に其の幽陰深微なる者に及ぶことを得。……唯当に世潮の深底に潜流する思想の傾向を察して、現前の事情が由て来る所の源頭に遡り、不測の禍変を激成する社会の沈滞を疏通して、之を未だ積まざるに散ずる所以を思ふべし。

すなわち、単なる外面的表層的な事象に関する議論に止まらず、国家社会の得失を根本から考えようとするならば、諸事象の奥底に潜流する思想の傾向を洞察して、眼前の状況の由て来る源に遡及し、問題が蓄積・複雑化する前に解決する方途を見出すべきである、としている。この場合の「潜流する思想の傾向を察して、現前の事情が由て来る所の源頭に遡り」とは、対象を歴史的に認識することにほかならない。つまり、同時代の諸現象を歴史的に認識することこそが新聞の役割であると唱えているのである。

注目すべきことに、これとほぼ同じ主張が、一五年後に刊行した『支那論』（全集五巻）の緒言でも繰り返されている。そこでは、支那問題解決の鍵は、国土人民の自然発動力の動きを見定めて方針を立てること、すなわち、表面の激しい順逆混雑の流水の底の底で一定の方向に向かって流れる「潜流を透見する」ことであり、「余等の如き歴史を専攻する者」にとっては、「数千年来の記録が示して居る所の変遷の中で、最も肝要な一節が、目前に一齣の脚色として演出されて居るといふのは、此上もない興味あることである」と論じている。現代支那の問題を解決するには、数千年来の歴史の変遷に位置づけて始めて可能になると述べているのである。

記者時代であると研究者時代であるとにかかわらず、湖南は一貫して歴史的な観点から対象を認識しようとしていたのである。すでに三田村泰助『内藤湖南』（中公新書、一九七二年）も指摘しているように、湖南における「歴史への兆し」や「中国史への関心」、さらに直観や芸術を重視する「思考の基本的な性格」、「文化史観への到達」は、いずれも相当早い時期に見られる。したがって前稿「内藤湖南の歴史認識とその背景」（『内藤湖南の世界』河合文化研究所、二〇〇一年）で明らかにしたような、ものごとは、その発生から消滅に至る流れの中において理解しなければ、真に理解したことにはならない、という湖南の世界認識のあり方も、すでに青年時代に確立していたに違いないのである。これがまさに、『涙珠唾珠』（全集一巻）をはじめとする湖南の早期の論著を読む時に、しばしば「早熟」ぶりを感じさせられる所以であ

ろう。

このように考えると、全集一四巻所収の著述は全て等しく、一切の対象を過去から未来へと続く変化の流れの中に位置づけて認識しようとした湖南史学の成果であると言えるのである。同じことを、湖南の中国認識に即して言えば、確かに思索や叙述の重点が、新聞記者時代には同時代の中国に、研究者時代は過去の中国に置かれているという区別はあるが、湖南が一貫して中国文化を過去から未来へと続く歴史の流れの中に位置づけて理解しようとしていたことは変わらないのである

以上、前置きが長くなってしまったが、こうした点をも踏まえ、湖南の方法論を四段階に分けて、その特徴を探っていくこととする。

第一章　対象論

本章では、まず湖南の歴史認識の対象について考えてみたい。全集一四巻を通観する者は誰もが、上古から現代にいたる中国ならびに日本のあらゆる事象が論じられていることに驚かされる。その幅広い認識対象と膨大な量に圧倒されて、全体像が見えにくいが、新聞記者時代に発表された著作には、日本や中国を始めとする東アジアの政治・外交・軍事などの時事問題全般が採り上げられている。一方ではまた、中国や日本の文化・学術に関するアカデミックな文章も、少なからず執筆されている。その後四二歳で京大東洋史講座を担う研究者になってからは、中国史に重点を移し、純粋な学術論文が多くなるが、新聞記者時代以来の関心も変わらずに持ち続けられ、中国の時事問題についての発言が為されている。このように多岐にわたる認識対象は、湖南のなかでは、どのように位置づけられていたのであろうか。

中国と日本の過去・現在・将来

まず認識対象としての中国については、以下の記述が手掛かりとなる。曰く、「支那を解釈するには、支那人が是迄積み上げた事業と云ふ者を十分に研究して見なければならぬ。その事業は一口に言えば文化であるが、その中には政治もあれば、芸術もあり、乃至は土工の遺物もあつて、迄（とて）も一人の力の窮め得べからざる所であるが、予は其の立場として、支那民族発展の跡を繹ねて、その文化を判別（けってき）し、之を理解する……」（全集七巻、一五九頁）と。支那文化のあらゆる側面を認識対象にしようとする立場が端的に述べられている。

しかも、「支那文化の特性なるものは、結局この永い年数のもたらして来た経験と其境遇から来た要素によって成り立つもので、今日の支那の民族生活の淵源は矢張りその由来を考究しなければ十分に解らないものである」（全集六巻、一四三頁）とあるように、中国文化の特性を理解するためには、神話時代から湖南の同時代に至る中国を、通史として認識の対象にすべきと考えていた。このように中国については、その過去、現在、将来のあらゆる現象について

認識の対象としようとしていたのである。

では何故、日本人である湖南が中国を認識の対象としたのか。これに関しては、『日本文化史研究』に以下の記述がある。「日本文化といふものは、詰り東洋文化、支那文化の、今日の言葉で言えば延長である、支那の古代文化からズッと継続して居るのである。それだから日本文化の起源とその根本を知る為にはどうしても先づ支那文化を知らなければならぬ」（全集九巻、二一頁）。同じことを別の文章では、「日本の歴史が始まつた時、其時に日本が有つて居た所の文化は、日本が根本から必ずしも持つて居たのでなくして、矢張り前に発達した国から其の文化を受けて居ることを承認しなければならぬ、然うしますと東洋の古代といふやうなことは単に東洋の古代といふやうなものでなくして、日本の歴史の無い前の時代、日本の文化の由つて来る所を知るに必要なものであります」（全集七巻、一五七頁）とも述べている。

つまり中国を知るのは、日本文化の由ってきたる所以であるからである。では何故、日本文化やその源としての中国文化ならびにその歴史を理解する必要があるのか。湖南という人物およびその学問を理解するための根本的なこの問題に関して、湖南自らは明示的に語っていないが、たとえばフォーゲル氏は、湖南をパブリシスト、すなわち「時々の政治の渦中に巻き込まれることなく、公共の事柄について絶えず自分の意見を表明する人」（『内藤湖南　ポリティクスとシノロジイ』一九頁、平凡社、一九八九年）であるとし、生命を賭して直筆しようとした中国古代の史官の高潔さに対する信念が極めて強かったとしている。

この説は、確かに湖南の現実に対する姿勢をうまく表現している。しかし、それでも、一体なぜ湖南はそのような姿勢をとったのか、さらに何故に自らの意見を社会に向けて表明しようとしたのか、という問題が残る。中国の史官の場合は、天道に関わる所謂「天官」としての位置づけが、人臣でありながらも、王朝権力から自立して森羅万象をあるがままに直筆することを可能にした。湖南の場合には、一体何が、彼の生涯を通じて、日本と中国の現状と過去を歴史的に考察させ続けたのか。

これについては、小島祐馬が論じたように、『燕山楚水』以来、『新支那論』に至るまで、湖南が生涯を通じて経世論を持ち続けていたからであると見るべきであろう。たとえば『支那論』緒言で、湖南自ら自分の課題は、「支那の人民に取て、最も幸福なるべき境界」を模索することであるとし、『新支那論』の結論部分（全集五巻、五四三頁）でも、「支那の歴史から今日の現状に迄及んだ政治、経済、文化その他の事を、正しき方針によつて研究すべく導く必要がある……少なくとも支那人及日本人に、何等かの警醒を促すことが出来れば幸である」と述べている。つまり、日本を含む東洋の国家、民族が、よりよい将来に向かって進むべく物申すことを自らの使命と考えていたのであり、そのためには自らが過去の万象を認識の対象とし、それについてより正しい見解を持たなければならない。つまり、東洋における過去の歴史の大勢を明確にして、現状ならびに将来に向けての方向性が正しいか否かについて、自らの意見を表明することを天職と考えていたのである。

二四才の青年湖南が、仏教新聞『大同日報』において、「済世の大願を発して塵の世を見捨てかねたる吾儂」には、荘子の斉物論の立場に立ち達観することはできない（全集一巻、四六六頁）と記し、また大正三年に四九才という円熟期に出版した『支那論』緒言において「多少の世の為、人の為にする婆心も籠つてある」と明記しているのは、まさに湖南自身による経世の志の表白にほかならない。加賀栄治はこうした点をとらえて、「経世の抱負と国士の気慨」を終生持ち続けた湖南の学問は「一己の箇身のため、名聞栄利のためにする学問ではなく、経世済民のためになす学問」であったと指摘し、そうした態度を「実学主義」と呼んでいる（『内藤湖南ノート』東方書店、一九八七年）。まさに、経世意識の故にこそ、湖南は自らの言説を世に送り出し続けたと考えるべきである。

以上の如く、湖南は、その終始持ち続けていた経世意識の故に、東アジアの現状を理解し、あるべき将来像を提示するために、過去のあらゆる歴史事象の沿革を対象として考察しようとしたのである。

学問の方法論

湖南の認識対象を考えるうえで、見逃すことができないのは、湖南が自らの学問ならびに経世論をより高次のものとするため、常に方法論の模索を自らに課していたということである。それ故、生涯を通じて、中国および日本の過去の優れた学者の著作を精読(時に発掘)･吸収し、また同時代に行われている研究の現状の把握・理解に力を尽くし、それらを歴史的客観的に認識・評価しようとした。つまり学術の歴史と現状を把握して、自らの方法論を鍛えようとしていたのである。

湖南が方法論を模索していたことは、たとえば「従来の研究の欠点、殊に日本の学者の欠点は、その研究法の組織が立たずに、単に或る書籍に就いて、専心に穿穴して、その点については非常に得る所があり、一経貫通の努力と成績とは賞するに余りあれども、古典学全体の組織には何等の加ふる所がなかつたのである」（全集七巻、一六一頁）、あるいは「然う云ふ方法にして始めて支那古典学の基礎が立ち、古代史の研究も出来るのである」（同上、一六三頁）といった記載から理解できる。さらにまた「日本で第一流の天才」富永仲基や章学誠に対する崇仰が、何よりも彼等の卓抜な方法論に対する評価に基づくものであることからも分かる。

すなわち「大阪の町人学者富永仲基」（全集九巻、三七五頁）なる一文では、「自分で論理的研究法の基礎を形作って、その基礎が極めて正確であつて、それによつてその研究の方式を立てるといふことは、至つて日本人は乏しいのであります」との語によって富永を絶賛し、章学誠についても、その「類ひなき卓見」とは、「あらゆる学問を方法論の原理から考へる」ことであると称賛している（全集一一巻、四七二頁）。逆に言えば、湖南が富永仲基や章学誠などを「発見」しえた最大の理由は、湖南が、常に自らの方法論を模索し弛まず精進し続けていたからこそ、と見ることもできよう。

また昭和三年二月に執筆された『研幾小録』凡例には、「余が近年の研究は、方法論に渉る者多し、此の編中の数篇（「尚書稽疑」「爾雅の新研究」「易疑」など）も亦其の傾向の一斑を見るべき者あり。然れども其の詳細は、余が已に稿を成せる、支那古代史、支那史学史に就きて看ざるべからず」とある。湖南自身が、方法論を意識的に模索していたことを明言している。しかも、それは決して「近年」だけではなく、一生の間続けられた。すなわち明治四四年の文章「支那学問の近状」（全集六巻、六一〜六六頁）では、「近頃は支那の学問も、根本から本当に研究しなければならぬと云うことになつて居る時代である。其の時代に於て最近はどう云うやうになつて居るかと云うことを知らぬのは、学者として恥辱であると思ふ。……現在日本の漢学と云ふものは、支那人の間に行はれている漢学に対して、短きは七八十年、長きは百年以上其の時代が遅れて居ると云ふことは明かである。……私は是から支那の学問をやる人に対しては、兎に角支那の現在の学問の状態を知つて貰ひたいと望むのである」とも述べている。こうした発言も、より理想的な研究法の獲得を念頭に置いてのことであろう。いま、湖南がとくに方法論を意識して同時代の研究状況を評価・展望した論考のタイトルを掲げてみよう。

今後の支那問題観察者	明治三三	全集二巻
支那調査の一方面	明治三三	全集二巻
読書に関する邦人の弊習	明治三三	全集二巻
近日画論の変兆	明治三三	全集二巻
中等学校の漢文科	明治三三	全集三巻
再び中等学校の漢文科に就て	明治三三	全集三巻
書籍采訪使を支那に派遣すべし	明治三四	全集一二巻
東洋史学の現状	明治四三	全集六巻
清国派遣教授学術視察報告	明治四四	全集一二巻
支那史の価値	明治四四	全集六巻
支那学問の近状	明治四四	全集六巻
支那の時局と新旧思想	明治四四	全集四巻
昔の満洲研究	大正二	全集八巻
支那歴史家の蒙古研究	大正四	全集六巻
支那古典学の研究法に就きて	大正六	全集七巻
支那人の見たる支那将来観と其の批評	大正一〇	全集八巻
支那研究の変遷	大正一三	全集五巻
日本画家は如何に支那を観るか	大正一三	全集一三巻
支那文化の研究に就て	昭和二	全集六巻

これら以外の文章にも、方法論の模索に関わる記述は少なくなく、要するに湖南は、生涯にわたって絶えず、よりよい学問の方法や研究の仕方に関する方法を模索していたのである。ちなみに神田喜一郎「内藤先生とシナ古代史の研究三題」（全集一一巻月報四、一九六九年）によれば、聖書の高等批評に対しても強い興味を抱いていたという。方法論の吸収に対していかに貪欲であったかが思い知られる。

同じ理由から、過去の学術史に対する関心もまた、生涯にわたって持ち続けられ、それは論考や著書となって結実している。論考は枚挙にたえないが、とりあえず以下の数篇を挙げることができる。

学変憶説	明治三〇	全集一巻
支那学変	明治三〇	全集一巻
支那の古銭及金石に就て	大正一一	全集未収
通典の著者杜佑	昭和四	全集六巻
昭和六年一月廿六日御講書始漢書進講案	昭和六	全集七巻

如上の論考に対して、方法論の模索を明確に意識した著書としては、以下の三冊を挙げることができる。まず、江戸文化史に対して「全観を尽くす」ことを企図した『近世文学史論』は、江戸儒学が、「日本の『近世』と呼ぶにふさわしい地平を独自に切り開き、客観的・科学的な学問の方法を生み出し」、それが医学、国学などの江戸の「文運」全体に波及・展開していったことを述べている（山田伸吾「『近世文学史論』の方法」、『研究論集』五集、二〇〇八年）。

このいわば江戸学術史における湖南の最大関心事は、先人による学問方法の創出ならびにその変遷である。たとえば、儒学については、徂徠が「前の古義に資りて、更に之を洗刷して、学問用心の根底より異見を出し」（全集一巻、六〇頁）、「史乗実蹟を知るを尚び空疎の言を斥」ける学問を樹立した。また医学においても、「世情の趨く所、議論漸やく唯物実験の主義に流る……医方に於て実に前古未有の大変態たり、一時趨嚮、各科の方法、必ず実験実行に拠りて、以て議論を立て、従前性理空談の習、洗除して遺すなし」（同上、六七頁）となる。さらに国学では、本居宣長が、「古道を明らめんと欲せば、先づ漢意を浄刷せざるべからず」とした真淵の意を継承して、「古言によりて古史を解し、古俗に徴して古道を明らむるの学を大成す」（同上、八六頁）ることとなったという。本書は、日本の学術史における近世への胎動を描くと同時に、湖南が江戸の学問世界に沈潜・研鑽して、学問の方法論を模索した記録であるとも言えよう。

次に『先哲の学問』は、たとえば山片蟠桃の『夢の代』について、「此の本を読みますといふと、実に色々な知識を得ますもので、私は若い頃から愛読したのでありますが、学問の方からの知識も得らるれば、実際の知識も得られる本であります」（全集九巻、四五七頁）との語

に象徴されるように、湖南が若年の頃から親しんだ山崎闇斎、富永仲基、山梨稲川といった先哲の学問の内容を紹介するとともに、その「学問の方法」、「研究の仕方」について解説している。

それは、たとえば富永仲基について、「自分の研究の方法に論理的基礎を置いた……学問を、今日の言葉で言へば科学的に組織だつた方法で考へた」（同上、三八六頁）とし、さらに新井白石について、「古代を研究するに、古語を研究し、古語の意味から古代をはつきりさす、これは支那でも西洋でも必要とされる方法であつて、この方法でやり出してから、近代に古代の研究が盛んとなつたのである。……あらゆる事に就て、古い本は古い語の研究から解釈しようとした」と述べている（同上、三五一頁）。さらに山梨稲川についても、音韻と字形と訓詁とを一つに綜合して研究するという方法を高く評価して、「支那の経学に重大な基礎を立てたのは、戴震が、小学からして経学をやるといふ方法をはつきり立てましたことにあります。支那の経学が、今日から考へても、学術的、科学的といひますか、組織的になつて来ましたのは、戴震からであります。若し山梨先生がもう少し生きて居られたならば、この基礎の学問が立つて、もつと経学がさかんになつたことであらうと思います」（同上、五〇三頁）としている。

また次章でもとりあげる『支那史学史』は、まさに名著中の名著で、「中国における史学的発展の基線がはっきりと描かれており、その背後には、時代思潮史ともいうべき観点が遠景を構成している」（谷川道雄「『支那史学史』中文版序」、上海古籍出版社、二〇〇八年）。それはまた、湖南自身にとっては、「博士が一生のうちに通読、熟読して消化され、所謂内藤史学の養分となった史書について、その自己の史学に於いてもつ意義と価値とを示されたものに外ならない」（貝塚茂樹「支那史学史書評」、『史林』三三巻一号、一九五〇年）。したがって本書もまた、湖南が中国の史書全般を渉猟・味読して、自らの歴史研究の方法論を模索した記録であると見ることができる。

この点を最も象徴的に示すのが、銭大昕に関する記述である。すなわち銭大昕について、まず「清朝風の史学の創立者である。当時の学風である考証の方法を史学に応用し、清朝一代の史学の研究法を立て……以後の史学の風を一変せしめた」（全集一一巻、三四〇頁）と評価したうえで、その「研究法」として以下の六点を挙げている。第一に正確な定本を求めたこと、第二に史料となるべき書籍の選択をしたこと、第三に金石文を利用したこと、第四に経学の知識を応用したこと、第五に沿革地理の学問に注意したこと、第六に暦数天文の学に通じたこと、である。さらに、こうした「銭大昕のやうな学問の仕方を、章学誠は史考の学とし、本当の史学でない」としたが、銭大昕自身は、「これら材料の学問だけで終る考はなく……顧炎武などと同じく、各時代の制度その他沿革の上より大勢の推移を考へるつもりであつたらしい。それが出来れば今日いふところの歴史が出来上がつたのであらう」と述べている。史学研究法が、湖南による叙述の焦点になっていることは明かである。

このように、湖南の学問史に関わる著作『近世文学史論』『先哲の学問』『支那史学史』は、

湖南が自らの歴史学の研究法を模索するため弛まぬ精進を持続した足跡であり、また自らの認識対象である日本中国の文化を理解するための学問である歴史学自身をも認識の対象としていたことの証なのである。

湖南自身

さらにまた、前掲拙稿で明らかにしたように、湖南の冷徹な観察眼は、人間としての自らをも認識の対象にしていた。すなわち青年湖南は、人間というものは年齢と共に醜悪になる一方であり、「老いては速やかに死せんことを欲すべし」と思念し、自殺肯定論すら唱えていた。しかし老いを迎えるや、そうした考えをあっさり放棄して、自虐的なまでに老いを受け入れ、悠々自適に余生を楽しむ諦観に達することになるが、そうした自らの変化を冷静に見つめ観察していたのである。青年湖南が記した「自ら視るより易きはなく、又自ら視るより難きはなし。自らを以て自らを視れば易くして而して明に、他を以て自らを視れば難くして而して昏きなり」（「現時の観察者」全集一巻、四七二頁）、あるいは「造物にも失策あり、人間に両眼を賦与するに、頗る其の処を失へり、人を視るにのみ便宜にして、自ら視るに極めて不便ならしめたり」（「両眼」全集二巻、三〇四頁）といった、自己認識への強い志向は、生涯にわたり保たれたのである。

また湖南の若き日の筆名からは、屈折して揺れ動く心情を一目瞭然に読み取ることができる。全集一巻の内藤乾吉「あとがき」に列挙されている筆名のなかから代表的ないくつかを挙げてみよう。

「不癡不慧主人」（おろかならず、さとからざる主人）
「冷眼子」
「落人後子」（人後に落つる者）
「罔両生」（罔両のような者。罔両の出典は『荘子』斉物論。景外の微陰、すなわち影の周辺の薄い影を指し、何かに依存して存在するが、実際には自律している者の意）
「洴澼絖子（へいへきこう）」（洴澼絖のような者。洴澼絖の出典は『荘子』逍遥遊。絖を洴澼する、すなわち絮（わた）を水でさらすの意で、一見、無価値でありながら、実際には極めて有用なものを指す）
「不平子」
「壺乾坤生」（宇宙を壺に入れるような視点に立てる者）
「臥遊生」
「悶々先生」
「坱圠（おうあつ）生」（坱圠のような者。坱圠の出典は『史記』賈生列伝。雲霧のように広がり際限が無いの意）。

こうした筆名からは、自嘲、自棄、自虐、さらに自負、矜持、自重、自尊などがない交ぜになり鬱勃として楽しまぬ心理を読みとれる。さらに筆名の多さは、何としてでも言葉によって自己を表現したいという意志の表れであり、自己認識に対する強固な志向を読み取ることができる。

本章では以下のことが明らかになった。経世意識を生涯にわたり持ち続けた湖南の認識対象は、日本と中国の現在および将来であり、その認識を充全なものとするため、過去のあらゆる歴史事象を沿革的に観察することが必要であると考えた。湖南はまた、そうした観察手段としての学問、すなわち歴史研究の方法そのものをも認識の対象とし、さらに、そうした認識を行っている自分自身をも観察の対象としていた。彼にとって歴史学は、自らを知り、自らを含む日本を知り、さらにその日本を含む支那文化を知るための方途であったのである。

第二章　史料論

前章における対象論を踏まえ、本章では湖南の史料論における特徴について論ずる。以下、「疑古」「釈古」という語を用いて論を進めるが、これらの語は多義的であり、しばしば論者によって意味する所が異なる。そこで本章では、史料論に関する次のような二つの立場を表す語として用いることにする。

言うまでもなく、歴史の史料は決して全てが信頼できる事実を記録しているわけではない。根拠のない記述や後代の偽作も少なからず存在する。それ故、歴史研究における最初の作業は、厳密な考証・批判によって、史料価値の弁別を行い、「附加の部分を去り」、「不正確と思はるるものを篩い落とす」（『支那上古史』八五～八六頁）ことである。この作業を疑古と呼ぶ。

しかし疑古は、あくまで研究の起点でしかない。そのような疑古に対する釈古の立場について、かつて楊寛は、古人の伝承は十人十色に異なるが、事柄の発生には原因がある。それぞれの伝承には必ず史実の残映が存在しており、一概に否定することはできない。それらに対して新たな観点から、帰納や推理を加えるならば、信ずべき古史を作り上げることができる、と唱えた（『中国上古史導論』自序六五頁、『古史弁』第七冊上、一九四一年）。同じことを楊氏はまた、我々は収集した史料に分析・綜合を加え、歴史の背景を検討して、その史料が本来有する価値を恢復しなければならない、とも表現している（同上、四〇一頁）。

つまり、疑古によって史料の属する時代を明確に弁別したうえで、後代性が明確な史料に対しても、方法を設けて何らかの史実を読み取り、歴史の真実に近づこうとする立場である。この場合の「方法」、あるいは「新たな観点から、帰納や推理を加える」という場合の「新たな観点」とは、甲骨金文・木竹簡をはじめとする考古学的史料との照合、未開民族などの調査によって獲られた宗教学・社会学・人類学などの知見の援用であり、文献史料とあわせて、二重証拠法、三重証拠法などと呼ばれている。

確認すべきは、楊氏の考えでは、歴史家の任務とは、まず「疑古」「考古」を行い、その後「釈古」によって完結させることで尽くされる（同上、六六頁）、ということである。つまり、疑古と釈古は互いに矛盾対立する立場ではなく、連続して行われるべき補完的な関係にあるのである。言い換えれば、「其の偽を弁じる」疑古は、「其の真を求める」釈古の前提として行われるべきものなのである（同上、四〇一頁）。

湖南もまた古代史料の用い方について、「宜しくその材料を選び分け、十分に批判して之を用いなければならぬ」（『支那上古史』一八頁）と述べている。史料の選別（疑古）とその批判的利用（釈古）とが、連続して行われるべき二種類の作業として位置づけられている。以下には、湖南の史料論における特徴を、如上の意味での疑古と釈古（その一、その二、その三）に分けて論ずることとする。

疑　古

湖南の疑古に対する考え方は、以下に引く「支那古典の研究法に就きて」（全集七巻）なる一文に最も明確に表れている。

> 経書といふ者を順次に晩出の書からして、上代にまで溯つて調べた上、割合に竄乱のない本に根拠して、更に一段と旧い処を研究して行く方法を取るのでなければ、確実に信憑すべき定論に達することが出来ないのである。……是の如き研究法は勿論一朝一夕には出来ないのみならず、如何に聡明な人でも、一人や二人の手で出きることでないが、要するに、研究の方法も定めず、単に部分的に考証を事として居ては、いつまでたつても、信用するに足る結論を得る事が出来ない。殊に今日は清人の如く経書を限界として、それ以上に疑問を挟むものを罪悪とする様な考へが必要でない。尤も方針のない研究法で、妄りに古書を疑うのでは何等の利益もないが、少なくとも以上の様な方針を立てて進んで行くならば、研究に多少の確実味を加へ得ると信ずる。然う云ふ方法にして初めて支那古典学の基礎が立ち、古代史の研究も出来るのである。

これは一九一七年における湖南の文章であるが、その核心はまさに疑古派の驍将・顧頡剛のそれ、すなわち「私は本当に、戦国の学を以て西漢の学を打破し、戦国以前の材料を以て戦国の学を打破し、これら二つの防衛線に突撃して、清朝の学者が成し遂げていない仕事を完成させたい」（「古史弁第二冊自序」一九三〇年）と一致している。

湖南による「疑古」の実態を考えるためには、必然的に富永仲基に言及せざるをえない。すでに述べたように、そもそも湖南が富永仲基を第一流の天才としたのは、その研究法を高く評価したからであった。湖南は三〇年以上の時間をかけて富永を発見・顕彰する過程において、富永が主唱した所謂加上法をはじめとする古代研究の諸原則を、着実に自らの方法論としてい

った。諸原則というのは、加上の原則（後述）、異部名字難必和会の原則（複数の伝説が並存する場合には、どれか一つを真実であると確定することはできないという原則）、「三物五類立言之紀」の論理（伝説や語義は人や時代によって大きく異なり、語義の変化には五種類の法則性が存在するという原則）のほか、語義の多義性は普遍的な現象であるといった原則である（「大阪の町人学者富永仲基」全集九巻）。

湖南は、これらのうち加上法を「思想のうえから歴史の前後を発見する方法」として絶賛し、上引の如く自らの「支那古典の研究法」であると宣言して、中国史に直接、当てはめ、「現在の支那の書籍に最も古い位置を与えられて居るものは最も新しい伝説であつて、比較的新しい時代に置かれているものが比較的古い伝説であることを知るのである」（『支那上古史』二〇頁）と述べている。

湖南が、富永の加上法をはじめとする疑古の原則を自らの方法として明確に用いている例を挙げてみよう。まず「附益、竄入、訛誤などの沢山積重つている古書を取扱ふ方法として」、実際に加上法を『尚書』の分析に適用し、「尚書にて周書の前に殷に関する諸篇を置くことは、孔子並に其の門下を去る遠からざる時代に為されたのであらうが、堯舜や禹に関するものは更に其の以後に附け加へられたものと考へ得られぬことはない」という結論を導いている（「尚書稽疑」全集七巻、二〇頁）。また『尚書』洪範に対して、詳細な文献学的考証を試み、核心部分と後代の付加部分を明確に腑分け・分離して、「かく洪範には後世の竄入が著しくあるけれども、其の原有の部分はたしかに古きものなるべく、……その附加の分を去れば、支那の王者の昔守つた大法は之によつて伝はつたといふことができるのである」（『支那上古史』八五頁）とする。

さらにまた、『尚書』のうち周公十二篇の「各篇を通じて見るに、その編纂は孔子及びその以後に行はれたものであるから、当時の思想や言葉の入つたものもあるであらう。故に古書によつて古代の事を研究するには、その編纂された時代といふことを考の中に置かねばならぬ。『史記』を作つた時代には、その時の思想で周代を扱ひ、孔子もその時代の思想で扱つたものとみるべく、その当時の真の事実のみを知るには、現存の金文か又はそれに類似せるものによるの外ない」（同上、八七頁）。しかし、そうした確実な史料は充分ではなく、「此の時代のことは、一々の事実を正確に定めていくことは不可能で、大体の事柄を知ると共に、後世の人々の書いた歴史とどれだけ異なるかを知るだけの研究が漸く出来るのである」という（同上、八八頁）。このあたりは加上法に加え、複数の伝説が並存する場合、真実を決めることはできない、という富永の「異部名字難必和会」なる原則の影響を明確に読み取ることができる。なお、富永の方法論が湖南史学に及ぼした影響、さらには、湖南史学と顧頡剛の所謂「層累地造成的中国古史」説との関係などについては、すでに多くの論者によって言及されており、これ以上の多言は控えることにする。

以上の如く、湖南は確かに疑古の立場に立って、史料を弁別し篩い落としている。これが湖

南史学の特徴の一つであることは間違いない。実際、湖南の「関門弟子」とも言うべき貝塚茂樹は、学生時代に湖南の京都大学における最後の演習授業「古代史料の研究」に参加した経験を持つが、その回顧談に登場する湖南も、確かに疑古派のイメージを強く伴っている。すなわち湖南の「御説」によれば、春秋三伝は、「口頭によって伝承されたものであるから、これを同時代史料として時代の歴史を知る金科玉条としてはならない」（『貝塚茂樹著作集』五巻、三四四頁）。また「完全な文章語で書かれた『左伝』も、根源に溯ると、戦国時代に口頭で流布していた伝説を、たぶん戦国時代のいつごろか、文章に定着したものであるという先生の説は、私にとって電撃のようなショックであった。……内藤先生は、こんな説話がもとになってできた中国の古代史では、朧気なことしかわからない。それを中世、近代史の正確な記録のように思いこんで議論することが間違いの根源であるといわれる」（同上、四〇四頁）。

しかし、確かに一読の限りでは疑古の側面が強調されているとの印象が強いが、貝塚氏の記述を裏返せば、湖南老師の真意は、春秋三伝に見える口頭史料は「金科玉条」とせず、慎重に扱うべし、『左伝』を正確な記録であると思いこまず、「朧気なこと」を理解するための史料にすべし、という所にあったとも言えよう。

まず疑古によって、史料の成立とその限界を明確に認識する。しかし、史料学の目的は、史料を篩い落とすことにではなく、「史料が本来有する価値を恢復」することにあり、何らかの方法を設けてそれを果たさねばならない。すなわち史料の形成ならびに伝承の過程を十分に吟味して、それに即した形で、可能な限り史実の反映を読み取る作業が求められる。それを釈古なる語を以て表現するならば、以下に見るように、湖南の歴史家としての真骨頂は、疑古にではなく、まさにその釈古において表れている。

釈古の一（書物の成立過程を考慮しての釈古）

湖南の釈古として、まず指摘すべきは、書物の成立・伝承の過程を考慮したうえで、後代の書物に史料価値を見出す、という考え方である。これについては、『周礼』に対する湖南の見方を例にしてみたい。『支那上古史』に曰く、「周礼が後に出来たから全部偽物なりとは云へない。後の人が先人の知らないものを見出すことは往々あることである。周礼は周の制度を記したものとしては最後に出たものであるから、その頃までに分つたすべてのものを取り込んでいる。……周礼は周公より漢初までの理想論と実際に有つた官職とを調和して作つたものである」（九四頁）、と。

また『支那史学史』では、『周礼』は、『礼記』の王制篇を「一層詳しく大袈裟」にしており、それが編纂されたのは「礼記以後であるに相違ない」と、後代性を明確にしつつ、その成立過程についてさらに詳しく述べる。

礼記の王制からして既に古い制度に関する記録を一種の著述にする考から作られたもの

であつて、月令などと同様の性質のものである。荀子の王制は殆ど未だ満足に昔の制度を編纂しようといふやうな考もなく、記憶その儘を書いた傾きがある。孟子などになると、一層正直にこのことを告白して、昔の制度は諸侯が己れに不便なるために皆な破壊してしまつたので明かでないが、自分の記憶に存するもののみを述べると云つている。つまり孟子以来、不確かな記憶が色々に潤色され、又他の方面から古い記憶が呼び起され、それを纏めたのが荀子の王制となり、更に礼記の王制となり、更に周礼となつたのである……故に周礼に有つて礼記・儀礼に見えないものの中にも、周の制度に関する貴重な史料が含まれているのである。……古文は最も従来の儒家の説に対しては異議が多く、その異議の多い論議の根底には、その出来た時代の考を含んではいるが、その材料には古いものがあるものと見るべきである（七〇～七一頁）。

このように『周礼』なる書物をその成立に即して綿密に観察すれば、出来た時代の考えだけではなく、そこに「古いもの」、「周の制度に関する貴重な史料」を認めることができる、というのである。言うまでもなく、書物は編纂された時代の産物であり、そもそもまた、この考え方を前提としてこそ、史料の属する時代を弁別する疑古なる作業の存在理由を認めることができる。湖南もまた、「古書によつて古代の事を研究するには、その編纂された時代といふことを考の中に置かねばならぬ。『史記』を作つた時代には、その時の思想で周代を扱ひ、孔子もその時代の思想で扱つたものとみる」べきである（『支那上古史』八七頁）、と述べている。

しかしその一方、上述の如く後代の史料の中に古い記憶が保存されていることもある、と湖南は主張する。その理由について、『尚書』各篇についての湖南の理解をもとに考えてみたい。たとえば湖南は、次のように述べて、盤庚篇に史料価値を認める。まず盤庚篇とは、武王が殷に克つた時、「殷の遺老に、殷の滅びた所以と人民の欲する所とを問」うた結果として残されたものであり、本来それは「口づから伝はつて居たものであらう。盤庚の事は後からの想像で出来たのとは異なり、殷の人民より直ちに聞いたものを記録したことは明かである」とする（同上、五八頁）。また『尚書』金縢篇についても、「比較的古い伝説が後に記録に入つたものであつて、召誥・洛誥の如く初めからの記録ではないが、相当確実な記録と見て可からうと思ふ」（同上、八一頁）と述べている。

同様に、清朝の学者によって復元された泰誓と牧誓の両篇について、その「文句」や「韻をふんでいて余程流暢である」ことが似ており、同じ傾向を持つ武成篇とともに「西周の代に出来、諷誦されて次第に言ひ伝へられたもの」（同上、七七～七八頁）とする。その後、これらの諸篇も文字化され、「其の記録になつた当時の考が雑らぬとは限らない。しかし兎に角周初を距たること遠からざる時代の伝説なることは明かで、其の内容（特にその日付や官名）は大体信用することが出来る」（同上、七八頁）。そのほか、経書よりも後代に成立した諸子についても、「ともかく諸子は昔は皆な官職の伝への典拠があつて起つたものであるから、その中に

は、今日史料としては経書に劣らぬもののあることは確かである」（『支那史学史』八五頁）としている。

以上の記載からすれば、上古における歴史は口頭伝承から文字記録へという過程を経るものであり、しかも口頭伝承には相当の信憑性を認めることができる。したがって、後代の史料であっても、古い時代の事実を伝えるものとして、その史料価値を認めることができる。文字使用が一般化する以前の記録のあり方をこのように考えた上で、湖南は後代の史料にも価値を見出すことが出来るとしたのである。

当時の文字と口頭伝承の関係に関する湖南の見方を、いま少し詳しく見てみたい。湖南は、先に言及した「尚書稽疑」と同じ観点からの論文「易疑」において、「一体諸の経書は、多く秦漢の間になつて、今日の形に纏まつたので、其中で春秋公羊伝のみは、何休の解詁に、明白に『口授相伝、漢の公羊氏及び弟子胡毋生等に至り、乃ち始めて竹帛に記す』といつてあるが、これが本音である」（全集七巻、四六頁）と述べている。つまり、多くの書物が「伝説」すなわち口頭伝承により伝えられ、その後文字記録化した、と考えていたのである。さらにまた、次のようにも述べている。

> 此の時代は多くは書いた文章よりは口伝の多い時代で、主なる君主の輔佐者の中には盲者があつて、それが故事を諳んじ、君主の問いに応じてそれを答ふるを常とした。その外は天文の職の者が天文を知り、卜筮の家の者が卜筮を知り、史官が君主の訓戒になることを知る位のことで、従つて文章が盛んにならなかつたのであらう……当時簡册はあつたであらうが、一時的辞命の類であつて、用が済めば之を残す必要なき為め、次々と失はれたものであらう。故に尚書を以て昔の簡册をそのまま編した者と思ふのは当らない（『支那上古史』一〇一頁）。

要するに「此の時代の史実は皆瞽史の誦が根底になつたものである」（同上、一〇六頁）、とするのである。しかも、そうした口頭伝承による記憶の信憑性に関して、「殷人は盤庚以後の事はよく記憶していたやうである。盤庚より紂までは、直系では八代になる。我がアイヌでも十代位の事は記憶しているから、今日存する書籍より考えても、盤庚以後の事は多少信用することができる」（同上、五九頁）の如く、口頭伝承の信憑性を認めていた。

そのうえ「『史記』は元来尚書の如き古書を引く時に、余り古い言葉は当時に分る言葉に直した処があるから、この還元された尚書は、言葉は真に古いものとはならないが、意味だけは失わないことが明かである」（同上、七七頁）。すなわち、後代の書き換えによって、「言葉」は変化しても、「古い時代の意味」が残されている可能性も認め、そこにも古い時代の歴史の真実を読み取ることができるのである。

以上のように、上古の文献は基本的にすべて、口頭で長期に伝えられていた伝承が、ある時

期に文字化されるという過程を経て出来ている。その場合、文字化された時代の思想が反映される可能性も当然あるが、その一方で、口頭伝承が保存してきた古来の「事実」がそのまま文字記録となる可能性もまた認めうる。また後代における文字の書き換えも、語彙や文体は変化しても、内容は古いということもあり得る。このような考え方を延長・敷衍すると、「従来の古文家・今文家は、今文を取れば古文を排し、古文を取れば今文を全く不完全なものと考へる傾きがあつたが、上述の如く、経書といふものが、漸次に発展して、幾回にも編纂されたものと考へるならば、今文古文の色々出来たことに就ての疑問は無くなる訳である」(『支那史学史』七一頁）の如く、今古文論争を相対化して、そのいずれに対しても客観的な立場から史料として扱うことが可能になるのである。

要するに、加上説では、古い時代に関する記述ほど新しく出来たことになり、その記述は基本的に新しい時代の思想の反映であると見る。しかし、口頭伝承が文字記録化される経緯を考えると、文献の「成立」と、それが伝える内容の年代は区別して扱うべきであるとの見方が成り立つのである。時代状況に即した柔軟な釈古であり、疑古とは次元を異にしている。言うまでもなく、相い反するこうした史料状況の中で、如何に史料価値を判断して（三重証拠法などの援用により)、史実の影を見出すのかは、すべて研究者の力量にかかっている。

釈古の二（作者の意図・時代状況を考慮しての釈古）

上述の如く、湖南は口頭伝承に信憑性を認め、そこに古くからの歴史の影を読み取ることができるとする。しかし、かりに古い伝承がそのまま伝えられたとしても、伝承自体が当初より不正確な内容であるならば、歴史の真実を再現するうえで、大きな障害となる。不正確な口頭伝承や文字記録から、如何にして客観的事実を読み取るのか。史料価値に必ずしも信頼を置けないそのような史料に対し、湖南はどのように釈古を行い、歴史の真実に近づこうとしたのか。これについては、『史記』の「欠点」に関する議論の中で以下のように述べていることが手掛かりとなる。

> 殊にその中でも伝説口碑を多く取入れた点は、今日の如く事実の考証を主とする歴史学からすれば、最も欠点とすべきことのやうであるが、しかし古代に於ては、口説なるものは決して記録より軽いものとばかり見ることは出来ない。口説は時代によつて変化するには相違ないけれども、口説は大体その道々によつてその道の目的の為に伝へられるものであるから、他の流儀のことは考へない。やはり文書を書く人が自分の都合のために文書を書くのと同一で、他の都合を考へない点において真実がある。種々の目的のために出来た口説を集めて見ると、その差違によつて、そこに真相が出て来る（『支那史学史』一三二頁)。

すなわち、たとえ主観的一方的な立場からする口説であっても、関連するものを複数集めて、互いの差異を比較検討することで、真相に近づくことが可能となる、というのである。複数の口説を集めることが、時代を溯るにつれて困難になるという条件をつける必要はあるが、極めて説得力に富む。つまり、史料価値に難点があると考えられる史料であっても、方法を講ずれば、真実を見出す手掛かりにすることができる、という主張である。

注目すべきことに、湖南はすでに新聞記者時代に、こうした釈古的発想を自らのものとし、デタラメや訛伝であるとされる文字史料、たとえば新聞記事などの読み方に適用している。「上海電報の読法」（全集三巻）なる一文によれば、上海電報すなわち上海発行の欧字新聞の記事は、「妄説、無責任、架空結撰」と見なされ、信憑性を認める者は皆無である。しかしその反面、それらは「上海居留欧人の意嚮（少くとも想像）を代表」しており、それに基づき彼等の「支那に対する観察、希望、意見」を知ることができる価値を認めなくてはならないという。湖南は、上海電報が事実を捉えきれずに誤報道ばかりを伝える理由について、次の諸点を列挙する。

すなわち東西両文明の性質・源委（なりたち）が全く異なり、欧人には中国を理解しがたいこと。取材源が極めて限られていること。しかも取材源の「支那人は世界中、最も謡言蜚語に富める人民なり、最も夸耀の思想に富める人民」であり、なおかつ、観察者たる欧人は「限りなき好奇の念に駆られ、支那社会の根底たる真相を」見破れず、結果としてその報道は「幻化無辺際」となること。さらに、「欧州の慣例思想を以て東洋の事態を律するの過に出づる」ことが致命的であるという。

しかし湖南によれば、そうした誕謾不経の報道は全く無価値ではありながら、「一面に於ては反て明らかに欧人特に英人の希望、意見、魂胆を徴するを得べし、而して英人の希望、意見、魂胆の反対なる反面は、即ち毎に露人の希望、意見、魂胆なるを知るべし。蓋し希望、意見、魂胆を徴するの価値より言へば、此の誕謾不経の報道は、寧ろ真実無妄なる者よりも、更に利益多し、上海電報を読む者、須らく是の如き観を作すべし」、であるという。

要するに、上海電報の記事は根拠のないデタラメでなければ、一方的な希望的観測であって、事実の解明には全く無益であるが、欧人の価値観を知るうえでは極めて有用である。しかも、その点に関しては、デタラメ報道のほうが正確な記事よりかえって役に立つ、とまで述べているのである。同様の認識に基づき、日露戦争の二年前に執筆された「訛伝と満洲開放」（全集四巻）では、ロシアが満州における既得権を放棄して、清朝との間に新たな条約（露清特約）を締結して「政事上、商業上の特権を取得せり」との報道は、「全く訛伝たることを疑ふべからざるも、猶ほ因りて以て露国の魂胆を窺い知る」ことができ、さらに今後も訛伝が続出して世人を驚かすであろうが、「其間には多少の訛伝ならざる事実を包有することあらん」と述べている。

このように、訛伝から当事者の価値観を読み解くという発想は、ほかでもない新聞記者とし

ての経験を重ねていく中で培われたに違いない。すなわち、当事者の一方的な説明や、うわさ話、デタラメといったものの中に、意外にも特ダネにつながる事柄の真相が秘められているということ、甚だしきに至っては、そのような情報の方がかえって、真相を伝えていることすらあるという、いわば取材の妙味あるいは奥義とでも呼ぶべきものを記者生活を通じて体得したと考えられる。そのようにして獲得された柔軟な目が、真実を伝えているようには見えない複数の史料の中から真実を読み取る、という釈古を可能にしたのであろう。

たとえば、史料価値について様々な議論のある『毛詩序』について、湖南は単に否定するのではなく、以下の如く釈古的に利用すべし、という。「かりに今日の毛詩の序は正確なものといふことが出来ぬとしても、いづれ当時には何かその詩の作られた由来の昔語りがあつて、それによつて序が作られたに相違ない。されば支那の古伝説を知るためには、この詩の序を全く廃することは出来ない」(『支那史学史』六一頁)。さらに「詩と離して考へるならば、歴史的資料としては詩序の記述は役立つのである」(『支那上古史』一〇七頁）とも述べている。

また明代の野史の風を帯びた掌故の書についても、「正確な事実を知るには役に立たないが、明代のその当時に一般に事実として認められていたことを知るにはよい。その事が偽りであつても時人はそれを真として信じていたのである」(『支那史学史』二七〇頁）と、野史風の史料の利用の仕方を述べている。『旧唐書』についても、「纏まつた史料のない処に材料を集めるのに苦心をしたものであるから、その下手な書法をたどつて事実の脈絡を尋ぬれば、当時の状態が髣髴として分明する点がある」(同上、一九五頁)とし、歴代正史の中で最も蕪雑とされる『元史』についても、「全体から云へば蕪雑であつて、天子の詔勅を記すに口語のものをそのまま改めもせずに書いている処もある位で、故(ことさ)らにいたづらをして、元代がかくの如く質陋であつたことを示したのであらうとまで云はれる位であるが、しかしそれだけに史料としては余り手を加へないものが入つているので、今日から史料として取り扱ふのには面白いところがある」(同上、二六七頁）と述べている。

以上のように、湖南は、史料価値が不安定な史料に臨む時には、当事者の「希望、意見、魂胆」、あるいは時人が「真として信じていたこと」を読み取るための材料とした。それによって「大体の事柄」、「時代の雰囲気」といった語で示される歴史の姿を明らかにしうる、と考えていたのである。だからこそ、次章で述べるように、「常識から考へて不信用な古伝説を巧みに取扱つた」林春溥の方法を、疑古的な崔述の方法に比べて「遙かに進歩している」と評価しえたのである（同上、三九四頁)。逆に言えば、湖南が求めたのは、古人が「信じていたこと」を知ること、つまり過去の歴史世界を共感的に理解することであり、そのためには正確な事実を知るうえでは信憑性が低いとされる史料も利用可能となるのである。

湖南は、朱子の古典理解について、「古書を取扱ふに当つて書物によまれずに紙背に徹する眼光を持つていた」（武内義雄談・本稿はじめに参照）と述べたと伝えられているが、書物に読まれるのではなく、こちらから読み込むという眼光を、湖南自身も有していたのである。

『毛詩序』を『詩』と切り離し、「歴史的資料」として役立てるという発想は、まさにその点を示している。ちなみに湖南は、早期の文章「作家」において、文学の文学たる所以は、「自然の黙示録たるに在り、開かれたる秘密の天啓たるに在り」。それ故、一個人を示すという点では、作家のではなく、作家ならざる人の著作の方が「自然の響き」が多い。逆に作家が嘔心吐血して著した著作は、作家個人ではなく、作家の属する「時代」を示すことが多い、と述べている（全集一巻、四一〇頁）。著作者の意図にとらわれず、こちらが読み取りたい事柄を読み取るという湖南の釈古の基本的な方向がすでに明確に述べられている。

釈古の三（直観による釈古）

如上の「釈古の二」とも関係するが、湖南の史料論における特徴として、さらに一つ、直観による釈古について述べてみたい。かつて湖南史学の「面白さ」について論じた際（前引拙稿）、湖南独自の直観によって史料価値を判断する鑑別法を採りあげて、次のように述べた。すなわち湖南は、名篇「応仁の乱に就て」（全集九巻）によって、下克上の雰囲気を活写することに成功したが、主なる史料として、専門的には「胡散臭い材料」である『塵塚物語』を用いた。そのことについて湖南は、「事実が確かであつても無くても、大体其時代においてさういう風な考へ、さういう風な気分があつたといふ事が判れば沢山でありますから、強いて事実を穿鑿する必要もありませぬ、唯だ其時分の気分の判る材料でお話して見ようと思ひます」（同上、一三二頁）と述べている。つまり論理ではなく、歴史家としての感性によって史料価値を判断するというのである。

また湖南は、史料から時代精神を感得する特殊な眼力（直観力）を文献以外の対象にも向け、絵画の鑑別などにおいても、その力を存分に発揮した。たとえば、大英博物館蔵「女史箴図」の真贋について、「即ち此の図巻が顧愷之の真跡でないにしても、少なくとも六朝末までの模本であることは確かであつて、顧愷之の時代を多く隔てざるものである」（全集一三巻、四六頁）と述べている。時代が近ければ、贋物であっても本物と共通の歴史的性格を有していることから推して、本物の画風を読みとれるというのである。しかも、そのような史料の扱い方の有効性を、湖南自身が確信していたからこそ、その歴史叙述には、多少の「胡散臭さ」は伴うものの、時代の特質とそこに輝く人間の個性を見事に切り取った史料が多用されているのである。要するに、湖南の史料論における特徴の一つとして、直観によって史料を鑑別するという、疑古とは全く異なる釈古の方法を指摘できるのである。

以上本章では、湖南の史料論として、疑古と三種類の釈古について述べてきた。繰り返すことになるが、本稿で言う史料論とは、史料の成立ならびに伝承過程を十分に知悉して、その限界と可能性に応じた取り扱いをすること。すなわち史料を最大限に利用して、それが本来有する価値を恢復する作業、ならびにそうした作業に関する考え方を指す。極めて単純化すれば、疑古とは、史料の限界を明確にして篩い落とすことであり、湖南はその方法を富永仲基に負っ

ていた。

その疑古を踏まえて行われる釈古とは、史料のなかに史実を見出すことである。すなわち、まず史料を弁別して、かりに後代性が明確で史料成立時の思想や語彙による潤色を見出しても、口頭伝承が文字化されるという史料成立過程のなかで保存されてきた古来の「事実」を慎重に読み取る（釈古の一）、記録者による主観的一方的な史料、あるいは後世から見て不合理な記述であっても、すなわち史料価値が低いと判断されるような史料に対しても見方を変えて臨み、そうした主観性一方性自体のなかに、あるいは「不合理」を不合理とは考えない当事者の論理のなかに、内包されている歴史の刻印（時代精神）を読み取ろうとするのである（釈古の二）。しかもこれらの認識は、論理によってではなく、しばしば独自の感性に基づく直観によって可能になった（釈古の三）。

このように湖南は、古代史においては、真の事実を確定することは困難であるとの前提のもと、「書物に読まれる」ことなく、疑古と釈古を駆使すれば、「大体の事柄は知りうる」と考えていたのである。なお、言うまでもなく釈古に関する三つの側面は、湖南においては本来不可分であり、おそらく史料に接した時点において、時代精神をつかみ取る独自の直観により史料価値を直ちに判断しえたに違いない。その他の二側面は、直観によって得た釈古的理解を、言わば論理によって後付けするための方法であるとも言えよう。

第三章　認識論

前章までには、湖南の対象論と史料論における特徴について見てきたが、次に論ずべきは認識論である。すなわち、湖南自ら「史学といふものは、その材料を集め、材料を選択するだけでは史学にならないので、それを如何に取扱ふかといふことが史学である」（『支那史学史』四八一頁）と述べているが、疑古と釈古によって弁別した史料に対して、分析・考察を加える作業において、湖南史学はいかなる特徴を有しているのであろうか。これについては以下に述べる如く、変化の思想と異文化理解の二点を指摘できる。

変化の思想

湖南の歴史認識の背景に変化の思想があることについては、かつて詳しく述べたところである（前引拙稿）。そこでは湖南の歴史認識の特徴として、あらゆる対象を理解するにあたり、その誕生から、変容、衰滅に至る全過程を明らかにしたうえで観察する、つまり変化の相において認識するという点を指摘した。さらにそうした歴史認識の背後に、『史記』と仏教思想の影響を読み取ることができる、とも論じた。その論文で言及しえた湖南の認識対象は、支那中古史全体、支那絵画、清朝史、経書、支那史学、江戸の語彙、江戸の人名、風俗、日本の文体、支那の学問、人間、湖南自身、社会、国家、民族などであった。

それを踏まえる本章では、まず『日本文化史研究』（全集九巻）を例にして、変化の相における認識について改めて検証しておきたい。この書は、増補、附録、補遺を含めて二四篇の論文で構成されているが、まさに変化の思想が全書を貫徹しており、日本文化や天平文化といった抽象的な事象から、神社、漢文学、肖像画、大阪の学問、普通教育、風景観、書道などという、実に様々の具体的な問題に至るまで、それぞれ変化の相において分析されている。以下に、そのうちの白眉と思われるところを指摘しておきたい。

たとえば「日本風景論」は、風景観の歴史的変遷という極めて興味深いテーマを採り上げた名篇である。そこでは、「風景に関する観念が或る程度に発達するには相当の歴史を要する、しかうしてその歴史によつてその国民の風景に関する趣味の程度を知ることが出来、かつそれによつてその国民の文化の程度をも知ることが出来る」（同上、二五五頁）とし、さらに「風景に関する考へは或る時代において雄抜な奇らしき変つた景色を求める傾きが盛んであつたが、長い間には必ず平凡な風景の中に、かへつて面白い景趣のあることを発見するに至るのが当然であると思ふ」（同上、二六二頁）としている。

また「日本文化の独立と普通教育」は、歴代の字書、教科書の内容を例として、支那文化の輸入に依って発達してきた我が邦の「教育の変遷」を示そうとした論文である。その骨子は、次のような四時期に分けて教育の変遷を示すことにある。すなわち前期は「教育が支那文化本位であつた時」で、さらにそれが「支那文学を主として、国語はそれを翻訳する為にのみ用いられた時期」と「国語が主となり、それに支那文字を従属させる教育が行はれることになつた時代」との二期に分かれる。これに対して後期は、教育が国語本位に変わってくる時期で、これがさらに「国語の教科書が支那文字の字書から離れて独立したが、……従来有るところの支那文学の様式に拘束されて居る時代」と「支那文学の様式を離れて、国語と必要知識とから教科書が成立つて来た時代」とに分かれる。そのうえで「この四つの時期の中、前半は公家教育を主とした時代で、後半の最初は中流教育の時代、最後は庶民教育の時代」と区別することもできる、と言う（同上、二四一～二四二頁）。

このほか全集を見渡すと、その博学多識に、すなわち文化のあらゆる事象が認識対象になっていることに驚かされるとともに、それら全てに対し、等しく変化の相において分析が行われていることに敬服させられる。その執拗かつ徹底的な姿勢には、ある種の辟易感をすら覚えるほどである。たとえば「紙の話」では、「これらすべての紙の変遷と、支那人の紙に対する関心と嗜好の推移とは、支那人の文化生活の一面を察知し得べき貴重な」材料であるとしている（全集八巻、八三頁）。また唐代のパスポートの実物について論じた、「三井寺所蔵の唐過所に就て」（全集七巻）では、最初に過所の「沿革」に関して、漢魏六朝間の文献史料によって明らかにし、その後、五代・梁の時までは用いられたが、宋中葉に至って廃絶するという変遷の経緯を述べている。

さらにまた、『清朝史通論』第四講では、「清朝の学問の大体といふものは、やはり漢学が主

なるものであつて、漢学といふものは大体今申したやうな変遷を経て来て居ります。……さうして今日以後も益々発達する余地がある」（全集八巻、三八一頁）として、中国で学問が本当に学術的になり全盛を極めたのは清朝であり、その清朝の文化を知るについて重大なことは、漢学の変遷を理解することである、としている。

当然ながら、湖南の同じその目は、同時代としての清末から民国二〇年に至る中国の現状にも向けられていた。すなわち『清朝衰亡論』（全集五巻）は、清朝衰亡の原因を探るため、清朝一代に原因を求め、その「兵力上の変遷」、「財政経済上の変遷」、「思想上の変遷」という三側面から検討している。また『支那論』（全集五巻）は、「破壊された清朝の跡に、新しい時代を建設する方から看た立論であるから、支那の古来、殊に近世の大勢を統論せねばならぬ」。つまり、清朝自身を中国史全体の変化の流れに位置づけたうえで、将来を見通す試みこそが『支那論』である、と述べている。さらに『新支那論』（全集五巻）では、「支那の歴史から今日の現状に迄及んだ政治、経済、文化その他の事を、正しき方針によつて研究すべく導く必要がある」（同上、五四三頁）として、やはり過去から現在、さらに将来へという変化の視点による研究であることを明言している。

これら三冊の書は、いずれも中国を変化の相において分析し、「大勢」、「大惰力」、「自然発動力」と表現される大きな動きをとらえ、それに照らして現状を理解し、問題を解決する方途を提示し、さらに将来を予言しようとしたのである。そうした湖南にとって、中国の眼前の状況は、過去数千年の歴史を背景として未来へと続く滔々たる時の流れの一齣として受け取られることになる。この点を最もよく示すのが、先にも少し言及した次の一文である。

> 余等の如き歴史を専攻する者に取つては、数千年の記録が示して居る所の変遷の中で、最も肝要な一節が、目前に一齣の脚色として演出されて居るといふのは、此上もない興味あることである。……試みに目下最も重大視せられて居ると思ふ幾つかの問題を提げて看て、それを一々かの大惰力、自然発動力の標準によつて見るといふのが、此の小冊子の出来る由来である（全集五巻、三〇六頁）。

以上、変化の思想が、湖南の歴史認識における特徴であることを再確認した。要するに、湖南にとって、対象を理解することは、そのものの現状をなりたたしめている過去を理解し、さらに、その将来のあり方をも考慮したうえで理解することであった。認識対象の現時点における姿を、大きな時間軸の中に位置づけ相対化して見つめ直すという視点にほかならない。

実際、湖南自らが、歴史学とは本来、こうした変化の視点によって物事を認識することである、と明確に述べている。たとえば島村抱月との論戦の中で、「文学史の研究は、氏が所謂抽象普遍の理が、時代の変遷するに随て、如何に起伏し、如何に各時代の特色を帯びて発現し来るかを主とすべき者なり」（全集一二巻、八二頁）と記している。「文学史の研究」という限定

のもとではあるが、歴史研究とは、普遍的な原理が時代に応じて如何に変化しつつ姿を現したのか、その変遷の跡を尋ねる作業である、と明言している。

また『清朝史通論』の結論部分で、「文化の全体を通じて見ると、経学・史学・詩文・書画等の各科に就いて、其の変遷の間には、或る点まで自から一種の共通した脈絡があるといふことが分かります」（全集八巻、四四五頁）と記しているが、これによって文化の各分野に通底する「変遷の脈絡」を捉えることが、清朝の歴史を描くことである、と考えていたことが分かる。さらにまた、湖南が日本第一の歴史家と評価する北畠親房の著『神統正統紀』について、「単に昔からの歴史を天子にお教え申上げるといふだけでなしに、昔の変化を述べて新しい時代の天子は如何なる覚悟でいられ、如何なる方法でなさるがいいかといふことに対する自分の意見を悉く現した処の著述であります」（全集九巻、一一九頁）と述べている。

以上において検証したように、湖南が変化の相において歴史を認識しようとしていたことは間違いない。ただし、ここで確認すべきは、湖南のみならず当時一般に、歴史学とは、ものごとを変化･沿革の観点から認識する学問であると考えられていたということである。たとえば、湖南の同僚、友人であった内田銀蔵は、その著『史学理論』（前掲）において、史学とは、「人生と其の産物なる文化」を対象として、「歴史的」に考察することであるとし、その歴史的な考察とは、「専ら事物の起源及過去に於ける変遷沿革を尋」ねること、すなわち「生成発展の関係に於て事物を考察し、如何にしてかくなりしかといふ問に答ふる」ことであるとする。さらに史学は、「個々の事実の確定より進みて其の綜合を期す。而して綜合を遂行するに当り、一方に於ては事実を適当に結び付けて生成発展の成り行きを目のあたり見る如く描出し、之を組み立て之を再現せんとす。又他の一方に於ては事実相互の因果関係を解釈し説明せんとするなり」と述べている（同上、一五五～一六一頁）。

したがって湖南史学の特徴として改めて論ずべきは、変化の原則や意味について湖南が如何に考えていたのかという点である。しかし、そうした点を追求しようとすると、問題は俄然、複雑化する。たとえば湖南は、天平文化の位置づけについて述べるくだりで、文化の発達一般に関して、支那の学問の影響を受けたかつての我が国では、後になるほど堕落するとする尚古思想があったが、近年は西洋の文芸復興以後の考へ方の影響を受けて、世界は進歩するものと考えていると指摘した後、次のように論じている。

> それはどちらもある点においては各真理でありませう、私ども歴史家と申しますものは、世の中を年代順に縦に見て行くのでありますから、これがもし進歩が停止するといふ風に考へると、ちつとも興味のないものでありますが、しかしそれが果して今日の時代に考へるやうに、必ず進歩するものかどうかといふこともこれも一つの疑問だと思ひます。これまででも私どもは随分支那の歴史をなるべく進歩したものと考へようとして居るのであります、支那のやうな保守的といはれている国でも進歩してをると考へてをるのであり

ます。……しかし近年になりまして、……今から二千年ほど前の漢代の文化といふものが非常に立派なものであるといふことが分かつてから、少しその事に疑ひを持つやうになりました。或はある時代にある種のものが非常に絶頂に達するまで発達した以上は、そのことについてはその以後の時代にはもうそれより以上発達しないのではないか、それ以後の時代において発達するのは、その発達すべき種類が変わつてくる……（全集九巻、一八一頁）。

このように、全体としては進化論的発想に立ちながら、同時に懐疑をも表明しているのである。さらに、「新雑誌及び新聞」（全集一巻、四四〇頁）なる文章では、「社会の進化は一定の規則あり、東西洋何れの国、何れの社会を問はず必ず此規則を履で発達する者なり、……誰か知らん社会の発達は一定の原則の下に支配せらると雖も、此原則をして緩急正変各作用現象を異にせしめ、以て特別なる国体特別なる人民を形るの刺衝因縁、他に数多之あるを」と記している。すなわち、社会発達の一般原則が、様々な具体的要因によって制約・影響され、そこに「緩急正変」の作用現象が生じ、それによって形成される「国体・人民」の特別なるあり方をこそ重視する必要性が唱えられている。

以上のように、進化論的な変化に限っても、湖南はその一般原則を認めつつも、むしろ例外的事態の存在や、現実の特殊性の解明に重きを置いている。これによっても分かるように湖南の変化の思想は、相当に複雑な内容を備えており、その全容を論ずるためには別稿を用意すべきである。ここでは、前稿を踏まえて、以下の如く三種類の変化の思想が並存していたことを指摘するにとどめる。

まず第一は、『史記』や『易』など中国古典に見られる循環的な変化、あるいは対立物への転化として表れる変化である。すなわち『史記』には、「三王の道は、循環するが若し、終わりて復た始まる」（高祖本紀讃）という語に象徴される循環の思想が見られるが、そうした『史記』の変化の思想と対応する記述を湖南の論著の諸処に見出すことができる。たとえば『近世文学史論』における「夫時運の豊亨、一たび其の極みに達すれば、則ち衰殺の勢生じ……」（全集一巻、三三頁）という表現は、『史記』平準書の「是を以て物盛なれば則ち衰え、時極まれば則ち転ず。一質一文なるは、終始の変なり」と対応し、また同じく「盛衰の理に達し、大勢を達観する」（全集一巻、三四四頁）という湖南の表現は、『史記』太史公自序の「始を原ね、終わりを察し、盛を見て衰を観、之を行事に論考す」と対応している。いずれも歴史の循環を意識したものの見方である。

つぎに『易』は言うまでもなく、森羅万象の変化を卦爻によって占断するための書である。すなわち、「泰卦・九三」の「平らかにして陂（かたむ）かざるはなく、往きて復らざるはなし」という語に表れているように、陰陽なる統一的な対立物が、消息・往来という、いわばエネルギーの盛衰・交替によって相互に転化する可能性を秘めながら、流転変化しつつ森羅万象を生み出し

ていく動きを先知しようというのである。とりわけ「幾(きざし)を知るは其れ神か……幾とは動の微、吉凶の先ず見るるものなり。君子は幾を見て作つ」（『易』繫辞下）とあるように、「幾」すなわち現象・吉凶の発生の萌しを捉えて、その将来を知ることに価値を置く。

こうした易の変化の思想が、湖南の歴史認識における一つの特徴であることについては、前稿で指摘した。すなわち、湖南が自ら最初にまとめた論文集『研幾小録』の「研幾」なる語は、まさにこの『易』繫辞上に見える「夫れ易は、聖人の深を極めて幾を研(きわ)むる所以なり。唯だ深なり、故によく天下の志に通ず。唯だ幾なり。故によく天下の務めをなす」という一文に基づいている。この書名に込められた真意は、自らの学問が、易と同様に、「幾を研む」、すなわち萌しを探ることによって現象の生成・変化を先知することを企図している、と示すことにあったと考えられる。つまり、『易』に見える変化の思想にならって歴史を認識しようとする姿勢を示しているのである。しかも、「神以て来を知り、知以て往を蔵す」（繫辞上）、あるいは「往を彰かにして来を察する」（繫辞下）とあるように、『易』においては、来すなわち未来を知り・察することと、往すなわち過去を蔵し・彰かにすることとは、不可分一体のことであった。

第二は、生老病死の語によって象徴される諸行無常の思想、すなわち万物は刹那的な存在であり、一切は変化の中にあるという仏教の変化の思想である。たとえば「贈渡米僧序」（全集一巻、三四三頁）には、社会にも人間の生老病死に類するものがあり、「夫れ幼よりして壮、壮よりして老、一社会の終始此に一元（発生から消滅に至る一周期）を全成すれば、此社会の滅亡して而して代わる者は必ず他の幼社会、老者の復た盛んなり難きは、個人然りとす、社会も復た然るが若し」と記している。社会もまた人間同様、発生、変容、さらに消滅の過程を経るとしている。

こうした湖南の仏教的な認識は、若い頃ほど濃厚かつ端的に見られる。すなわち、湖南自ら応募して甲賞に入選した「少年園を読む」（全集一巻）は、仏典や中国古典の多引によって構成された美文であり、その内容は、自立して単身、「生存競争、修羅闘諍」の人生行路へ進まんとする著者（湖南）が、至福の少年時代を回顧するというものである。冒頭の一段を見てみよう。

> ああ人生幾何ぞ、譬えば草上の露の如し、赫たる紅日、斜めに東山の頂より射来たらば、昼待ちあへず晞(かわ)くべし、五十歳月、長きが如しと云ふと雖も、無量寿の天地より較算し来たらば、一弾指にだも直るべからず、さるを猶昨歓に恋々とし、来苦に惴々とし、且つ満足し、且つ企望し、且つ追憶し、且つ予想し、五尺の身躯、椀大の頭脳を以て、四方八面、見る処に知解分別を作し、……矧(いわ)んや其変ぜざる者よりして之を観れば、蜉蝣も以て大椿と寿を争ふに足るをや、刹那に来たり刹那に去るの刻は、皆是れパラダイス也、七宝荘厳の浄土也、修羅闘諍の巷也、焦熱叫喚の地獄也……（同上、四四二頁）。

知解分別より生ずる煩悩に対し、刹那に生きるという自覚を以て臨むこと、つまり諸行無常の諦観を体得し、その立場から世界を見るべし、と唱えているのである。

湖南の変化の思想として第三に指摘すべきは、西洋の社会進化論が唱える直線的な変化の図式である。たとえば「時代と中心」なる文章には、社会発展の図式が明確な言葉で示されている。曰く、「宗教が中心の時代あり、政治が中心の時代あり、今の時は、政治が中心の時代なり。腕力が中心の時代あり、財力が中心の時代あり、今の時は財力が中心の時代なり。……今の時に当たりて、宗教者の敵とすべき者は、政権なり、財力なり」、と（全集一巻、三〇〇頁）。これと同様の図式は、他のいくつかの文章でも唱えられている。

湖南の著述のなかには、このように発展図式が明言されている例とともに、一定の進化の図式を暗黙の前提にして論理を組み立てている例も見られる。たとえば、帝王の世系に基づき社会状態が推測できるとして、周の世系に見える王名に関して、「不都合にも、棄は農作の人、公劉も農作の人なるに反し、皇僕・高圉・亞圉の如き馬を扱ふ人が後に出てくるのは信じ難く、これは後世作為したものといふべきである。……周は全然時代が狂つて居る」（全集一〇巻、四九頁）と述べ、さらにまた「之を信ずれば農が先に開け、牧畜が後に開けたことになるが、これは少し自然の発達に合わない」（同上、七四頁）としている。この記述からは、湖南が牧畜から農耕へというかなり素朴な社会進化論を論拠としていることが分かる。しかし上述の如く、それはあくまで進化論的なものの見方とすべきであり、決して教条的なものではなかった。

以上のように、湖南の認識論における特徴の一つとして、対象をその背後にある沿革に位置づけて理解する、すなわち変化の相において理解するという点が指摘できる。より詳しく言えば、変化に関する古今東西の様々な思想・学問を念頭に置いたうえで、自己を含むあらゆる認識対象について、それぞれの具体的な発生から衰滅に到る変化の流れを見きわめ、その流れに位置づけて理解し、さらにその未来をも知ろうとしたのである。

異文化理解

ここで言う異文化理解とは、上に述べた変化の思想が、対象を外側から、いわば冷静かつ客観的な立場に立って行う認識であるのに対して、当事者と同じ立場に身を置き、自らの目線を当事者の目線に重ねて共感的に認識・理解するということである。

こうした湖南の二つの立場は、司馬遷や崔述に対する両義的な評価に明確に表れている。すなわち湖南は、『史記』の編纂方針に関連して、次のように述べている。

> たとへ諸子百家の説でも、経書に佚したものをそれから採るのはよい。ただ雅馴でないものを採らないとあるのは、当時としては良い方法であつたらうが、必ずしも全く正しいとは言ひ難い。……禹本紀・山海経にある所の怪物に至つては、自分は敢て之を言はずと

云つている。すべて雅馴なるものを取る主義がこれで知られる。雅馴といふのは、正しくして訓へになるといふ意味で、即ち論理上より考へて合理的であることである。これは当時としては進歩した考であつたらうが、之が為めに、古来の奇怪なる伝説を務めて合理的に解釈する傾きを生ずる。例へば殷や周の先祖の生れて来た由来は、司馬遷の学んだ詩伝では、父なくして生れた子であつたに相違ない。……ともかく三家の詩伝よりは合理的で、昔の奇怪なる伝その儘とは異なつたものである。かかる点は司馬遷の判断法にも一種の弊のあることが見られるが……歴史を必ず合理的に解釈することは、今日の進歩した考からすれば、必ずしも正当ではないけれども、当時に於ては進歩した考であつたのである」（『支那史学史』一一五頁）。

つまり、古伝説のうち雅馴なるものだけを採用するという司馬遷の方針は、当時としては「進歩した考」であったが、今日の「進歩した考」からは、受け入れられない、というのである。湖南は同じことを、より明確に「墨子に引かれている尚書は大部分が伝説よりなる。太史公は雅訓にして道理に適えるものに信用を置いたが、古の伝説は雅訓ならず、奇怪なことを書いてあつても、その方が却つて信用の多いことがある」（『支那上古史』八〇頁）と述べている。古代社会に身を置き古代人の立場で見るならば、奇怪な記述のほうがかえって信憑性が高く、「合理的な解釈」だけでは、古代人にとっての真実を読み解くことはできないというのである。

ほぼ同様の論理で、崔述に対しても、両義的な評価を下している。すなわち、顧頡剛によって疑古の先駆として位置づけられた崔述の研究法全般に対しては、辛口の湖南にしては珍しく、「頭は鋭い」、「この人の頭のよいことを示す」といった語によって基本的に肯定的な評価をしている。たとえば『考信録提要』巻上「釈例」には、崔述の研究法の「原則」が記されているとして、その大要を詳しく紹介している。

先づ書を読むには信を考ふべしとて、古来より学問の変遷するにつれて事実の誤られ来つたことを総論した。先づ見る所多ければ誤り少く、見る所少なければ誤り多しと論じ、何かある事実があると、己の見る所の少ないために、己の知つているその当時に存在したと伝へられる人物にあてはめ、その事実に対して中心になる人を定めることを第一に排斥した。……次に己を以て人を度り、今を以て古を度り、不肖を以て聖賢を度るは宜しからずと言つている……（『支那史学史』三八九～三九一頁）。

しかし、そのような崔述の研究法も、「現在の常識によつて古代の伝説を推して考へるので、時に判断の当を得ぬことがある。……元来が伝説であつたものが、後に史実のやうに考へられるに至つたものであることに考へつかなかつたのである。これは古代の伝説時代のことをも、後世の常識で考へた為にかかる結果となつたのである……かかる点に崔述には判断の誤りがあ

るけれども、大体古代のことを考へるのに、なるべく確かな書籍を根拠として、その他の雑説を正すといふ考はよい。……しかし古来支那で古代の事を研究した学者で、彼の如く明快な議論をした人はない。つまりこれは古代史研究の啓蒙時代といふべきもの」（同上、三九二頁）とも述べている。

要するに湖南は、崔述の疑古的な研究法を評価する反面、自文化中心主義的な判断を避けるべきと唱えたはずの崔述が、自らその過ちを犯して、「現在の常識」に基づき古代の伝説を解釈して判断を誤った、と批判しているのである。

あの称賛すべき司馬遷、崔述ともに、「合理的な解釈」「現在の常識」に基づいたために、古代の伝説の伝説たる所以を明らかにできなかったというのである。それではどうすればよいのか。

そのためには当然、解釈者が自らの常識や価値観を一旦棚上げにして、古代的な価値観によって、古代世界に臨む必要がある。すなわち、上述の如く湖南は、明代の野史の利用の仕方について、「正確な事実を知るには役に立たないが、明代のその当時に一般に事実として認められていたことを知るにはよい。その事が偽りであつても時人はそれを真として信じていたのである」（同上、二七〇頁）と述べているが、これと同様に、後世の常識や価値観からすればデタラメであると判断されようと、古代世界の人々にとって真実と見なされていたのであるならば、その真実を真実たらしめていた古代的論理を理解しない限り、古代を理解したことにはならない。つまり、最も必要なことは、自文化中心主義的な見方を克服し、古代的論理をあるがままに解釈しようとすることである。以下に、そうした湖南の異文化理解の実例を挙げてみたい。

たとえば、『詩経』大雅・生民に見える周の始祖・后稷の母が、巨人の足跡を履んだため、感じて子を生んだとする、いわゆる感生伝説を、宋代の欧陽修や蘇洵が荒唐無稽であるとするのに対し、湖南は、「古代の伝説はかかる理屈に叶わぬ所に確かに古いところがあるものである」（『支那上古史』七二頁）として評価している。また周公が武王の平癒・延命を祖先神に祷った顛末を記す『尚書』金縢篇についても、「今日の常識論者は、周公の如き聖人に迷信のある筈なしと言ひ、又金縢が尚書の他の篇と体裁を異にし、長い間のことを前後取揃へて書せる点などより疑いを挿むが、然し此の身代りを祷る事は寧ろ当時有り得ることであつて、その祷る語も質朴で当時の状態をよく表したものと見えるから、是れは古い伝説によつて記されたものであらう……比較的古い伝説が後に記録に入つたものであつて、召誥洛誥の如く初めからの記録ではないが、相当確実な記録と見て可からふと思う」（同上、八一頁）と、書物としての成立年代とその内容の年代を切り離し、そこに信憑性を認めている。現代の価値観によって判断せずに、古代的論理を、そのまま認めているのである。ちなみに言えば、甲骨文や近年出土の戦国簡牘に見える祈祷関連の史料から考えると、湖南の金縢篇理解は極めて妥当である。

しかも湖南は、こうした異文化理解の方向へと進むのが学問進歩の自然の趨勢であると早く

から考えていた。すなわち、若き日の論文「青年の仏教徒」において、研究の方法が時代にともなって変化する過程を、支那に例をとり、大略次のように述べている。

まず、文字を以て聖賢の心を得んと欲した漢から唐の訓詁学は、「其字釈句解、必ず伝承する所あり、敢て縦ままに私意を加えずと雖も……固より聖賢の真意を髣髴の間に窺ふの眼光あらず」。ついで人智の進歩は、こうした齷齪（あくさく）の事に満足することができず、宋に至り「字拘句束の弊を一洗し、直ちに霊活々たる己が一心を以て」、聖賢の経伝に対し、貫通縦横して理解を加えることになる。この宋学は、漢唐の学に比べれば「上ること数等」ではあるが、独断に過ぎ、妄りに古義を変え、明確な根拠もなく錯簡を改補するに至る。よって、古の聖賢の意を得るという点において、「其の冥契暗合する処は、一絲を差（たが）へざる」ほど精緻な理解に至ることもあるが、逆に「違背乖離する処は」、千里の開きにとどまらなくなる。それ故、明清時代に考証の学が起こり、文字章句の末を以て聖賢を求めんとする旧弊は見られるが、「其憑据漠然たる伝説を取らずして、却て多く同時代の事に参考し、字解句釈の拘束を脱して、当時社会の境遇風習を以て拠とし、我を以て聖賢を視るの空談を去りて、聖賢時代の聖賢を視んと欲するの傾向あるは」、学問の進歩自然の趨勢である、と述べている（全集一巻、五一五頁）。

このような趨勢からすれば、崔述の疑古派的な研究は、上述の如く、あくまで「啓蒙時代」の手法であるとしか位置づけられない。清朝の学者のうち、この趨勢に適う学者として湖南が挙げるのは、林春溥である。曰く、「林春溥は、古史の研究に就いて古代の伝説に理解を有し、崔述と異なり、複雑な手数をかけて、手際よく利用して判断した。古代史の研究法としては、崔述の啓蒙時代より林春溥の方が遙かに進歩している。これが清朝の学風に相応した古史研究法である」（『支那史学史』三九六頁）、と。また曰く、「この人は崔述とは違い、常識から考えて不信用な古伝説を巧みに取扱った。三墳といふ書が今日あるが……これは尤も信用の出来ぬ書である。これらも好んで取扱ひ、偽造されたやうに思われるものの中から、何か役に立つことを拾い出さうとした」（同上、三九四頁）、と。

言うまでもなく、異文化理解を行うために、第一に求められるのは、自らの価値観を一旦棚上げすることであり、湖南もしばしば、その必要性を唱えている。たとえば「読書に関する邦人の弊習附漢学の門径」なる一文において、日本の学者の欠陥として、「主我の見太だ強く、其幼学習慣の薫染より生ずる偏局の定説先づ胸中に横はるありて、誤って之を名けて見識と為し、爾せしより後、一切箇の自ら名くる見識に拠りて判断し、其の見識と合せざる者は之を容るるを欲せず、又之を信ずる能はず」（全集二巻、一六六頁）の如く、先入観によって判断することを挙げ、批判している。

また、日本の中国論者が、「支那の歴史に存する潜運黙移の精神を知らないで、日本人の思想を以て支那の歴史を解釈した極めて浅い考から言ふ」（全集四巻、五六九頁）状況にあることを厳しく批判し、異文化理解の必要性を唱えている。さらにまた、湖南と同時代の日本の画家は、五百年ないし七百年前に過ぎ去った「宋の画院」や「明初の画院」の人々の物の見方で

支那の風景を見ている。したがって近代の支那画を鑑賞せんとするには、此の見方を改める必要があり、「見方が改まつて後、始めて支那画の時代的変遷の意味も解り、又殊に、近代画の趣味の奈辺に在るかが諒解される」（全集一三巻、五三三頁）と述べている。絵画鑑賞における自文化中心主義批判である。

こうした異文化理解の姿勢が湖南の認識論における特徴であることは、すでに同時代人である大島徹水によって指摘されている。

> 多くの学者は仏教を自己の学問の上から見てとやこう判断して見る癖がありますが、内藤先生の仏教の見方は、自分の学問のなかや我見をもつて見るのでなく、その教えの上から判断するといふ偉いところがありました」（安藤徳器『西園寺公と湖南先生』二一六頁、言海書房、一九三六年）。

異文化理解の必要性は、日本の台湾統治政策に関しても訴えられている。湖南が台湾で執筆した文章に、「変通なき一視同仁」という一篇がある。このやや理解しがたいタイトルは、「実情に応ずるという柔軟性を欠いた画一的人道主義」とでも意訳できようが、湖南はそのなかで、日本の台湾統治に対して、現地の実状に配慮せず画一的な文明化政策を進めているとの異議を唱え、「社会の発達、人民の思想に高下の差あれば、則ち其の下き者をして遽に高からしむるの不可なるは、……小児を愛して、其の成長を速かにせんが為に、直ちに成人と同様の衣食居所を取らしめば、彼堪ふることを得んや」（全集二巻、三九四頁）と記している。つまり、歴史的な発展段階が異なる相手には、それに即した理解と対応とが必要であり、自らの価値観（一視同仁）は、そのままでは通用しないことを指摘している。

湖南はまた、異文化理解が日支両国で相互に行われることが、親善関係を成立させる前提であるとする。すなわち大正五年に発表した時論「両国国民性の理解と日支親善」（全集四巻、六〇〇頁）では、以下のように述べている。

> 之を要するに両方がその長所短所を理解して、自分の方の標準を以てのみ他を計ると云ふことをせずに、他の方の標準をも互いに考へると云ふやうになつて、相互に尊敬心を失はなければ、両国民の交際は茲に新しい進歩を持ち来たすことを得るだらうと思ふ。かくの如き點を先づ我日本人が注意すると云ふことが必要であつて、之れは單に支那人の疑懼心を去つて、それに安全を感ぜしめると云ふのみでなく、真に各々の長所を理解して、互いに相親しむ感じを起さしめる基礎になるものと思ふ。

なお、湖南の異文化理解に関連して、是非、付言しておきたいことがある。湖南の中国認識がしばしば誤解される一因として、『支那論』自叙に見える「支那人に代つて支那の為めに考

へる」という語がある。この語は独り歩きして、「人はここに植民地経営にあたる本国知識人による対植民地の認識視点に類似するものを容易に見出すであろう」（子安宣邦「支那学の成立」、『現代思想』一九九三年七号、一六二頁）と理解されることすらある。しかし、自叙の文章では、問題の語に続き、「外国の側から、例へば我が日本の如く、支那の事勢によつては、多くの利害を感ずべき国から看た議論の欠けて居ること」をあらかじめ断っておきたい、と明確に記されている。つまり、ここで湖南が述べているのは、明らかに自らの依って立つ観点についてである。すなわち『支那論』は、支那人の立場に立って考えた議論であり、そこには外国人としての立場からの議論は欠けている、と自ら言明しているのである。これと同様に、湖南は自説を展開する際、しばしば自らの議論の依って立つ立場を明示することがある。無論それは、立論の観点を明確にすることによって、自らの議論に対しても冷静かつ客観的に見つめようと務めているのである。

たとえば「清国に代て謀る」（全集三巻、三一五頁）なる文章には、「今若し吾輩をして清国に代りて、現在の形勢に処せしめんか」との語が見える。これは、チベットが清朝の衰運を視て、ロシアとの外交交渉を始めたことにより、満州の問題とあわせて東西において困難な外交問題を抱えることになった、そのような情況に自らを置いて議論するという意味である。また「支那問題」（全集四巻、五八三頁）なる文章においても、「一方は支那の前途を極めて自然の成行きから考へ、それから又支那人が自分の成行を考えて自覚すると云ふ上から考へると云ふことと、それから日本の政策上から考へる事と違います」、「以上は支那人の政治の方から考えるのでありますが、日本の方から考へますと」（同上、五八五頁）等の語が見えている。これまた、支那人としての観点、日本人としての観点を明確に区別し、自らの議論は、そのいずれにも立ったうえでの立論である、と述べているのである。

要するに、「支那人に代つて支那の為めに考へる」という語は、湖南が日本人としての自らの立場から一旦離れ、当事者である支那人の立場でものを見るという、まさに異文化理解の観点に立つことを表明しているにすぎない。確かに湖南の語調は、現代人からすれば、やや高慢尊大に受けとられかねない部分があることは否めない。しかしそれは、今からほぼ百年前に五十才の帝国大学教授によって書かれた文章が与える語感以上のものではなく、そこに対植民地的認識を読み取ることはできない。

眼は冷たく心は熱く

このように、湖南は自文化中心主義を避けて、極力、異文化をそれ自身の論理に即して理解すべきことを唱えた。それでは、前述した変化の思想と、この異文化理解の姿勢は、湖南のなかで如何なる関係にあったのか。

まず確認すべきは、変化の思想は、認識対象を歴史の大きな流れに位置づけ、いわば局外者・傍観者の目でものを見るということである。たとえば『清朝衰亡論』の結論部分で、「故

に今日の支那の状態は、是は大勢の推移、自然の成行であつて、今の官軍が勝たうが革命軍が負けようが、それで大局が変ずるものではない。……是は幾百年来の趨勢で、今日ではどうしても一変すべき時期に到着して居るのである」（全集五巻、二五七頁）と、一種の冷徹な諦観に達しているとすら思えるほど、大勢の推移を重く見ている。同じ『清朝衰亡論』緒言でも、「時局に小曲折はいくらあつても、大勢の帰着する処は、結局一である」（同上、一八九頁）と述べ、やはり大勢の変化は止めようもなく進み、人間の思慮や営為を以ては抗いきれない、と見ている。

こうした変化の思想によって物事を観察する立場を、湖南自ら傍観者、局外者の語を以て形容している。すなわち「支那の改革といふことについていろいろに考へ、……支那自体が生んだところの思想並に社会組織でなければ、支那にはたうてい芽生えることが出来ないといふことを発見するに至つたので、その点は支那が実際に経きたつたところと同じ経過を自分等の頭に持つているのであるが、ただ自分等はいくらか傍観者の位置に立つて、冷静にその経過を考へることが出来るために、当局の支那人よりかは或は確実な知識といふものをつかみ得る便宜が多かろうと思ふ」（全集八巻、一七二頁）と記し、また「聡明なる意見は毎に局外より出で、健全なる主張は多く勢利圏内の人と伴はず、是れ殆ど世の常情にして怪しむに足る者なし。帝国議会の未だ開設せられざるや、所謂政党なる者は、単に空言の下に集まれる団体に過ぎず……然るに其時に当たりて、政党の健全、党人の熱誠之を今日に比すれば、殆ど隔世の思あり」（全集三巻、三三三頁）と記している。

歴史の大きな潮流に自らの目を重ねて、森羅万象に対して前述の如く循環、転化、諸行無常、進化論といった様々な変化の思想によって、いわば相対主義的さらには虚無的な視線を注いでいたのである。この点では、天道の立場から現世を観察・記録していた史官と同じであるとも言えよう。そのような冷徹な立場から見れば、万物一切が相対的な存在となって、あらゆる現象は全体状況の中におけるそれぞれの位置に即してのみ、意味づけられることになる。

これに対して異文化理解は、認識対象を当事者の立場に立って、それ自身の論理に即して意味づけるという姿勢であり、言わば当事者にとっての真実を明らかにする。たとえば『支那上古史』の「春秋時代通論」に以下のような記述がある。

> 春秋より戦国に変る間の著しい事の一つとして、軍事上で車戦が歩戦に変る事がある。これは春秋の時より戎狄と戦ふ必要から起つたやうである。晋が肥・鼓の如き赤狄を亡ぼす時に、大体は車戦の組織であつたけれども、臨時に車戦を徒戦に改めて夷狄を破つたといふことがあるから、これが始めての事であるかも知れない。戦国時代になると、車戦を騎戦に変じた著しいことがあるが、歩戦に変ずることはこの時代から行はれたものである。

これだけでも、車戦から徒戦へという戦争形態の変化について十分理解できるが、湖南の湖南たる所以は、これに続けて「かかる事は、戦士の名誉に関することと見え、晋の此時の命令を聴かない者があつたといはれている」（全集一〇巻、一二六頁）という一文を加えている点にある。この戦士の名誉云々というくだりは、『左伝』の「荀呉の嬖人、卒に即くを肯んぜず。斬りて以て徇（とな）う（総大将である荀呉の寵臣が、戦車を降りて歩兵として組織されることを拒むと、これを斬首して見せしめとした）」（『左伝』昭公元年）という、わずか十二文字に着目して加えられたにすぎない。しかしこの一行が加わることで、戦争形態の転換が当時の人々にとって如何なる意味を持っていたのかが極めてリアルに理解できる。すなわち、戦士としての名誉や自尊心を守るために徒戦を拒否した人物の目線による意味づけを追加することにより、歴史の潮流とそこに生きる人間の息吹を数千年を隔てて蘇らせているのである。

湖南の著作には、このような例がまさに枚挙に暇がないほど多く見られる。言うまでもなく、物事を当事者の目線に重ねて見ようとする湖南の立場に立てば、自ずと当事者の喜怒哀楽などの感情や価値観・世界観をうかがうことができる史料を多引することになるからである。その結果、読者は、歴史上の人物の「人間」としての存在を具体的に感得できることになるのである。

時には、感情移入の結果として、当事者に対する湖南の同情や怒りが熱情を伴って記されることもある。たとえば「光緒帝」（全集二巻、三〇二頁）なる一文では、明の崇禎帝もフランスのルイ十六世も暗君ではなく、彼等は、「治を希ふこと至て切にして、而して数百年積重の勢に圧せられて、其の傾覆の禍を奈何ともすること能はざりき。光緒帝の運命、頗るかの二帝に類するを見て感傷殊に深し」と述べているが、歴史の大きな動きを踏まえ、そのもとで生きる個人の無力を、その人物の立場に立って共感しつつ指摘している。さらに「冷眼子」なる文章でも、「人皆女子の教育を云々す、知らず云々する時、果して身を女子の境界に置き一想過するや否や、汝は高等教育を要せず、高等教育を授くるは汝に於て害ありて益なし、汝豈に勃然として怒らざらんや……」（全集一巻、四八〇頁）とある。

以上の如く、局外者・傍観者として歴史の流れを冷徹に捉える目と当事者になりきって物事を見る熱い目が、湖南のなかで並存していたのである。この点について、当の湖南自身が自己分析をしている。

> 心は熱ならんことを欲す、而して眼は冷ならんことを欲す。……我れ自ら冷眼子と名く、冷は眼に在る也、世人誤て夫の死灰槁木の者と一例に視て、冷眼子が日来哀惜せる一滴丈夫児の涙を融出せしむる勿れ（「冷眼子」、全集一巻、四七八頁）。

要するに、湖南においては冷徹な観察眼と熱い同情心とが、すなわち変化の思想と異文化理解の姿勢とが、齟齬することなく並存していたのである。歴史の大勢について冷徹に見通すこ

とができればできるほど、認識対象や当事者をそれぞれ歴史の局面に位置づけて、より深くより客観的に理解することができ、それだけ、その存在や生き様に対する共感の度がつのり、同情心が熱くなる。つまり、眼の冷たさに反比例して、心は熱くなるのである。これこそが湖南における両者並存の理由であろう。

以上、本章では、湖南史学の認識論における特徴としての変化の思想と異文化理解について述べてきた。湖南は、一方では傍観者の目を以て歴史の大きな変化の流れを冷静に捉え、もう一方では、当事者の目を以て、すなわち歴史の内側から認識対象を熱く共感的に理解しようとしたのである。

第四章　表現論

対象論、史料論、認識論を駆使して一定の結論に到達した後、最後の作業として、一連の思索・論証の過程を表現することになる。湖南史学の特徴として最後に論ずべきは、その歴史的思索を表現するに際しての特徴である。

湖南の文章表現一般に関しては、京都大学で教鞭をとる以前、とくにその青年時代において、様々な必要に応じ各種の文体を書き分けていることを指摘できる。通常の新聞記事、論説あるいは社説風の記事のほか、すぐれて学術的な文章、仏典や漢籍に見える語を多用した難解な美文、諧謔や皮肉、隠喩に充ちた短文、さらに寸鉄人を刺すかの如き警句･箴言などである。一方、研究者となってからは一転して、基本的に、読み上げればそのまま講演原稿にもなりそうな分かりやすい文体のみとなる。

湖南と文章表現に関して、いま一つ指摘すべきは、湖南が少年時代から死の直前に至るまで、漢詩の彫琢に強い執着を見せ、絶えず他者に添削を依頼して詩作の鍛錬に勉めていたということである。すなわち、青年湖南が父親に宛てた書簡には、

> 御示の如く児は詩に於て古体は快く作り候へ共短律はいつも不満足の思ひあり……此もひまには学問修練をつみ短律も少々は格に入る様致度候……学殖足らねば想像がありても之を述ぶる材料なく誠に面白きことを言ひかねて居候事毎々に御座候」（明治二三年一一月一八日内藤調一宛書簡、全集一四巻、三八二頁）

なる記述が見え、より良き「表現者」たらんことに対する強い意欲がうかがえ、しかも、その意欲は生涯にわたって持ち続けられた。これらの点についての論究は、やはり別の機会に譲ることとして、本章では以下、とくに歴史叙述における象徴主義について述べることにする。

象徴主義

前章までに述べたように、湖南は、変化の思想により大きな歴史の流れを把握して、認識対象の属する時代の歴史的性格を理解し、それに基づいて史料を選択・把握し、そのうえで自らの目線を当事者の目線に重ね合わせて対象に向き合い、その時代や文化の特質、ならびにそこに生きる人間の個性を観察・理解しようと努めた。湖南はさらに、そうした作業の結果を目に浮かぶが如く叙述することを目標としたのであるが、そのことを湖南は象徴主義なる語によって表している。

すなわち、前掲拙稿でも言及したが、湖南にとっての歴史叙述とは、過去の時代と人間の特質を可視的に生き生きと描き出すことであり、そのための方法が「象徴主義」である。たとえば湖南は、『史記』の叙述について、「逸事とか人の実見談を巧みに用い、その事実を活動させ、それが小説にならぬ程度に書いたので」あり、これこそ「史家の手腕」であり、「歴史を書く人の腕前から云えば至当」（『支那史学史』一九八頁）であるとする。また『資治通鑑』や『新唐書』が、野史や小説を巧みに用い「当代の裏面の生活」を表わそうとしたことを評価して、「歴史は案牘・文書の行列ではなくして、象徴主義を主とするものであるといふ論がある」（同上、二一〇頁）と記している。

湖南が『史記』や『通鑑』を例にして論じている象徴主義とは、逸事とか実見談を引き、過去の人物を「活動」させ、それによって実録や案牘といった「表面の材料」では表すことができない、「裏面の生活」すなわち時代精神そのものを描き出すことである。実際、湖南自らもまた意識的に、そうした「象徴主義」の立場に立ち、時代の特質を象徴する逸事や実見談を効果的に用い、生き生きとした歴史叙述を行っている。とりわけ湖南が意を用いたのは、我が身を過去の世界へと没入させ、歴史的人物と直に接するという感覚を以て研究し、そうした「実感」に基づき、その時代や人物を目に浮かべることができるような叙述を行うことであった。

すなわち早期の著作『近世文学史論』について、「みずからその時に処して、しこうしてまのあたりそのひとに接するが如」くして研究した結果であると述べているが（全集一巻、一三頁）、こうした姿勢は以下にいくつかの例を挙げるように、生涯にわたり一貫して持ち続けられた。

そのような湖南であったからこそ、古人との邂逅が可能となるような史料には、とりわけ強い興味を示した。たとえば、越前の漁民達の漂流譚を記した『韃靼漂流記』の史料価値を高く評価したのは、順治帝の摂政・睿親王などに引見された時のことが極めて具体的に記され、諸王の人となりを如実に思い浮かべることができるからである。湖南が言うには、「漂流人が見たる三王の容貌、性質は、当時の史伝を読む上に大いに興味を与える、中にも睿親王の人と為りが活動するやうな心持ちがする。……清朝開国史の第一頁を実見した漂流人の奇遇が、大いに歴史家に感興を与へる訳である」（全集四巻、四一四頁）。また曰く、「僅かの文句でありますが、睿親王の来歴を知つて居る歴史家などには、誠に眼前に睿親王を見る心地が致します。

さういふやうに、この漂流記は余程の面白味をもつて読むことが出来る」（全集八巻、二三七頁）と。

したがって史書に対する評価も、過去を具体的にイメージできるか否かを基準にしている。たとえば『通鑑紀事本末』に対し、「その時に生れて親しくその事を見るの思ひがあり、一目その事を知ることができる」という楊萬里の序文を取りあげて高く評価し（『支那史学史』二一七頁）、『南宋雑事詩』についても、「これを見れば、南宋時代の臨安の繁昌の有様が目前にみえるやうである」と述べている（同上、三八四頁）。また、かの本居宣長が、半生の心血を注ぎ、その本領を発揮して完成した『古事記伝』について、「其の書を読めば、上世の言語風俗、器服礼文、身処して而して目睹するが若し」（全集一巻、八七頁）としている。

象徴主義に基づく湖南の歴史叙述は、逸事や実見談が心憎いまで巧みに用いられ、読者は過去の社会や文化の状況、さらには人物について明確なイメージを結ぶことになる。そうした例は、まさに枚挙に暇がなく、前稿とは異なる例を二、三挙げてみよう。

たとえば、全集未収の「支那の亡兆」（『太陽』二五巻七号）なる一文では、支那が滅亡に帰する兆候の一つとして賄賂を挙げ、悪事には違いがないが、久しい間には「賄賂の中にも自然に何となく一種の秩序が立」つことになるとして、次のように述べている。

> 清朝時代には、漏規或は陋規と称して居る。道光の頃、穆清阿と称する有名な賄賂取りの宰相が在つたが、或る低い地位に在る官吏が過分に大きな進物を持参した、処が穆清阿は此の進物はお前の身分に過ぎて居ると言つて之を受け取らなかった。是は若し身分相当のものであつたならば、勿論是を受け取ったに違い無い……（一二五頁）。

しかし、辛亥革命以来、この賄賂の中の秩序が全く紊乱して、無制限に取るようになったとする。この「秩序ある賄賂」の例が挙げられていることにより、それが無秩序化した際における「国民道徳」の低下と人民の不幸なる境地が、一挙に納得できるのである。

また『資治通鑑』について、「その編纂が謹厳に扱われたことを物語るものとして、通鑑の草稿は二棟の庫に充ちて残つて居つたのを、黄山谷がその数百巻を見たが、草稿には一字も草書で書かれたものがなかつたといふ話しが伝えられている」（『支那史学史』二〇八頁）と記し、さらに「通鑑の編修があまり永くかかるのは、温公が編修の手当を私用に供した為めであるといふものがあつたので、温公は結末を急いだ為め、唐より五代頃のことは繁冗であると云つてある」（同上、二一三頁）と記す。この二つの象徴的な逸事は、『通鑑』の成り立ちや性格を知るうえにおいても重要であるが、それより、九百年以上も前の歴史書である『通鑑』が、具体的な意志を持ち感情を持つ人間の手によって編纂された作品として、当時の状況や雰囲気をともない一層身近なものに感じられるのである。

さらに清朝において校勘学が全盛期を迎えた頃の状況について、全般的な説明を加えた後に

次のように記している。

> 当時相当産のあつたものが、校勘学をやり、出版などを企てた為め、全く産を失ふまでに至つたやうなものもあつた。古書を集め校勘をやつたものは、自己一代の中に仆れるか、或は子の代に至つて仆れるかした。……かかる蔵書家の中で最も気の毒なのは張金吾である。この人は八万巻の書を集めたといふ。さうして愛日精廬書志を作つたが、その出来上がつた道光頃には、既にその蔵書が借金の為めに持つて行かれ、学問のできるので自慢であつた妻も死に、自己もそれから一年を経て、四十三歳を一期に若死にしてしまつた（同上、四三二頁）。

こうした記述により、「経学のみならず、総ての学問の基礎学」（全集八巻、三七五頁）でありながら、「学問中最も贅沢で、微細な所にまで注意を要する」（『支那史学史』四三四頁）校勘学の一面を、また当時の文人にとって学問が如何なる意味を有したのかということを、彼等の人となりとともにリアルに理解できる。加えて「書籍を芸術的に取扱ふ風が盛んになり、正直にいへば書籍を骨董扱ひをなし、愛玩を兼ねたもの」（同上、四三二頁）となっていく時代状況をも感得することができるのである。

設身処地・紀事本末体

以上の如く湖南は、過去の人物の生き方と彼らが属する時代の歴史的特質を、双つながら鮮やかにイメージできるような叙述を理想とし、実際にそれを実現していたのである。それでは、実見談や逸事の効果的な利用による象徴主義的な歴史叙述を、湖南は、いかにして自らのものとしたのであろうか。

結論を先取りして述べるならば、自らを歴史的世界へと没入させ、そこで得た実感を歴史理解の核に据えるという認識方法、ついで、そうした実感を逸事や見聞談を引用することによって表現するという叙述スタイルは、いずれも伝統中国における歴史学の最高到達点であり、湖南はまさに、それを自家薬籠中のものにしていたのである。

前者の認識方法については、羅炳良『一八世紀中国史学的理論成就』（北京師範大学出版社、二〇〇〇年）に依拠して述べることとする。この書は従来ともすれば、訓詁考証の学としての側面だけが評価されてきた、いわゆる乾嘉の学（清朝考証学）が、実際には歴史の客観的理解に関する理論面においても長足の進歩を遂げ、大きな成果を挙げていたことを明らかにした注目すべき好著である。すなわち、歴史展開の動因に関する理論、歴史展開の法則に関する理論、歴史と現実（過去と現在）の関係に関する理論、さらに歴史認識の原則に関する理論について、それぞれ一章を設け、具体的な成果を明らかにしている。そのうち本稿の論旨と直接に関わるのは、歴史認識の原則に関する理論についての成果である。

羅氏は、杭世駿、王鳴盛、趙翼、銭大昕、崔述、洪亮吉、章学誠などの歴史認識のあり方を検討して、これらの乾嘉学者には、先人の説に盲従せず、史実に対する客観的な考証を踏まえ歴史的文脈に照らして評価するという態度が、普遍的に見られたとする。その典型として、崔述の議論が引かれている。

> 夫れ古を論ずるの道は、当に其の心を平らかにして其の世を論ずべし。しかる後に古人の情、得るべし。若し先入の見を執りて、復た其の時勢を問わずして、但だこれを揣度し、以て必ず当に然るべしと為さば、これ須らく有ることなかるべきの獄なり。烏んぞ定論と為すに足らんや（『豊鎬考信録』巻一・弁太伯不従翦商之説）。

尤も前述の如く、この原則を唱える崔述にして実際には、自文化中心主義の制約を免れてはいなかったことを湖南は指摘しているが、羅氏の著書は、乾嘉期の学者がこうした認識態度を普遍的に志向するようになり、原則となったことを強調しているのである。

それはともかく、対象を歴史的文脈に照らして理解するというこうした原則は、羅氏によれば、古くは『孟子』萬章下篇に見える「古人を尚論（古代に溯り真に理解）」するための方法、すなわち「其の詩を頌し、其の書を読むも、其の人を知らずして可ならんや。ここを以て其の世を論ず。是れ尚友なり（古人の詩を朗唱し、古人の書物を読んだからといって、その人物の如何を知らずして良いわけがない。それ故、古人の生きた時代状況を理解する必要があるのであり、これが古人を友とするということである）」にまで溯る。以降、「知人論世」の語によって象徴される孟子の歴史理解の方法は、後世の史学者により、意識的あるいは無意識的にのっとられ、如上の乾嘉期に至って普遍的に受け入れられることになる。さらに、最後にそれを総括して極めて高い理論水準へと引き上げたのが章学誠であったとするのである。

すなわち章学誠は、歴史認識における不可欠の態度として、「恕」を挙げ、「古を論じて必ず恕とは、寛容の謂にはあらずして、能く古人の為に身を設けて地に処するなり（古を論ずる場合の恕とは寛容を意味するのではなく、古人を理解するに際し、その時、その場所へと我が身を没入させ、当事者の立場で理解するということである）。……古人の世を知らずして、妄りに古人の文辞を論ずるべからず。其の世を知るも、古人の身処を知らざれば、亦た遽かに其の文を論ずるべからず」（『文史通義』文徳）と述べているのである。

こうした羅氏の見解に基づけば、上述の如く湖南が生涯持ち続けた「みずからその時に処して、しこうしてまのあたりそのひとに接するが如くする」という歴史認識の態度は、実は中国の伝統史学が最終的に到達した歴史認識の原則と一致していたのである。ただし、周知の如く、「忘れられていた」歴史家・章学誠を「最初に発掘・顕彰」したのは湖南であり、章の学問全体に関する言及も少なからず残されているが、ここで問題としているような章学誠の歴史認識の態度に関する記述は全く見られない。つまり、湖南の認識態度が、章学誠の著述から直

接学び取られたという確証は見いだせない。

しかしながら羅氏の言うように、章学誠の認識態度は、はるか孟子の「知人論世」に源するものであり、以後、中国の文史を通ずる古代認識の態度の一つであり続けた。たとえば、章学誠の「古人の為に身を設けて地に処する」という語の典拠として、厳傑・武秀成『文史通義全訳』（三三五頁、貴州人民出版社、一九九七年）は、朱子が『中庸章句』二〇章の「群臣を体する（群臣を理解するの意）」に施した注の「体とは、設くるに身を以てし、其の地に処らしめて、其の心を察するを謂うなり」を挙げている。

また台湾の中国史学史研究者、杜維運は、こうした認識態度を「歴史想像（historical imagination）」なる語によって表し、中国史学における例として、章学誠の他、王船山『読通鑑論』巻末・釈資治通鑑論の「身を古の時勢に設け、己の躬から逢う所と為し、慮を古の謀為に研き、己の身から任ずる所と為し、古人の宗社の安危を取りて、代わりて之が憂患を為し……」、戴名世「史論」（『戴名世集』巻一四）の「其の身を設け以て其の地に処らしめ、其の情を揣り以て其の変を度る」といった記述を挙げている（『史学方法論』一五一頁、北京大学出版社、二〇〇六年）。さらに山口久和『章学誠の知識論』（三五六～三五七頁、創文社、一九九八年）は、「設身処地」なる語の由来について、「本来、俚言に近かったこの言葉を文学作品創作の方法概念として洗練使用したのは、清初の戯曲家・李漁あたりであろう。……どうやら元明以降の戯曲の盛行の中から生まれてきた概念であるように思われる」と述べている。

いずれにしても、早くから中国の文史に博通していた湖南にとって、孟子以来の「知人論世」の原則は、まさに習い性となって自然に身についていたと考えられ、それが湖南三二才の時点における「みずからその時に処して」云々という『近世文学史論』自序の表現になったのであろう。実際、同じ自序の冒頭に、「その時を尚論し、その人を尚友す」との語が見えるが、この「尚論」、「尚友」なる語こそ、先に引用した『孟子』萬章下篇に見える「知人論世」の原則を象徴する語にほかならない。

このように見てくると、『文史通義』『校讐通義』を一九〇二年に杭州で入手して（『支那史学史』四七二頁）以来、それを「愛読」（全集七巻、六九頁）するようになった湖南は、歴史認識の態度に関する章学誠の記述を読み、大きな共鳴を覚えるとともに、改めて自らの歴史に臨む態度に自信を強めたと考えられる。すなわち、湖南は章学誠の論著によって、自らの歴史理解の方法の正しさを再確認したのである。

つぎに論ずべきは、上の如き認識態度により歴史に臨んで獲得した実感を、実見談や逸事を利用して表現するという叙述スタイルを、湖南は、いかにして自らのものとしたのか、という点である。まず指摘すべきは、上述の如く湖南は、読者に明瞭なイメージを結ばせ、「その時に生れて親しくその事を見るの思い」がある『通鑑紀事本末』を高く評価し、いわゆる紀事本末体を最も進んだ歴史叙述の方法と考えていたことである。紀事本末体の出現理由とその位置づけについて、湖南は次のように記している。

史上の事実を単に或る場合に故事来歴を知る為に必要とするのみではなくして、歴史全体を治乱興亡の因果を知るべき一のまとまつた系統ある事柄と考へ、その目的に適つた歴史上に一貫した因果の上からそれを記憶する必要ありといふことになり、そこで通鑑は断代の歴史を一変して古今を通じた通史の体に作られたのであるが、なほその上に索引的の類書でなくして事件の類別によつて因果をつなぐ為めに作られたのが紀事本末である。故にこの体は後まで便利なものとして採用されたが、これは歴史に対する考の進歩である」（『支那史学史』二一七頁）。

さらにまた、「文は紀伝より省き、事は編年より明かである。……これは今日から見ても、最も進歩した歴史の書き方にかなつたものであつて、人の伝記・年歴に束縛されず、人間社会に起る事件を中心として書いたものである」（同上、二一八頁）、「単に通鑑の記事を、一つ一つ事件を纏めて記憶する為めに、便宜上書いたに過ぎないのであるけれども、歴史の発達の順序としては、……自然に古代の最上の著述の趣意に合するやうになり来つたのである。章学誠のかういふ見方はつまり言はば、最近の歴史の体裁と自然に合して居るのであつて、今日西洋の有名な著述でも、すべてこの紀事本末の体で書くことになつているのであるが、歴史がさうなるべきものだといふことは、章学誠は百五十年前に於て考へて居つたのである」（同上、四七九頁）と述べている。このように、紀事本末体について、「歴史の中で最も便利な最も進歩した体裁が出来た」（同上、四九四頁）という「支那の史論家」の意見を追認している。

要するに湖南は、成法のある理想的な著述としての『尚書』、編年体の『左氏伝』、紀伝体の通史『史記』、紀伝体の断代史『漢書』、さらに『左伝』に似た編年体の通史『通鑑』などの後を承けて出現した紀事本末体、すなわち事件を中心に纏めた紀事本末体の叙述を、「最上の著述の趣意に合する」（同上、四七九頁）と考えた。だからこそ湖南は、その論著を読みさえすれば誰もが気づくように、自らの歴史叙述の「さわり」の個所を、この言わば最上の著述スタイルとしての紀事本末体によって表現しているのである。また、湖南が効果的に引用している実見談や逸事とは、まさにこの紀事本末体を、すなわち起承転結の備わる事件史としての紀事本末体を高度に凝縮したスタイルなのである。

なお、関連して付け加えるならば、前稿では、湖南がとりわけ対話史料を多用することについて、読者を、いわば対話の傍聴者としての立場に置くことにより、読者と過去の間に存する時間の壁を取り除き、臨場感を以て過去に臨むことを可能にしている、と指摘した。しかもこの手法は、湖南が慣れ親しんだ『左伝』や『史記』など中国古典の伝統であり、これもまた特に意識することなく身に付けていたと考えられる。

要するに、湖南の象徴主義的な歴史叙述は、その認識態度ならびに叙述スタイルの面で、伝統的な中国史学の最上のものから大きな影響を受けていたのである。

時代精神の直観

とは言え、歴史世界に没入し当事者の立場に立って理解しようとする態度で臨み、さらに逸事や実見談を利用して紀事本末体で表現しさえすれば、ただちに象徴主義の歴史叙述が実現するわけではない。何度も述べているように、象徴主義の歴史叙述とは、過去の歴史事象や人物を明確なイメージを以て描き出すとともに、時代精神を象徴していなければならない。湖南の歴史叙述が持つ象徴性やイメージ力は、どこから来るのであろうか。

湖南における象徴の問題を考える時、直ちに想起するのは、湖南の芸術家としての資質である。すなわち、湖南が一生をかけて詩作を鍛錬し続けたこと、また中国絵画に精通し、その鑑識眼には定評があり、名著『支那絵画史』ほかの著述をなしたこと、さらに能書家であったこと、これらの事実は、湖南が一面において美を追求する文人、詩人であったことを物語る。

そのような資質を有する湖南にとって、詩や絵画といった芸術は、そこに時代精神を明確に見出すことができる貴重な史料となった。すなわち、「文学の文学たる所以は、「自然」の黙示録たるに在り……作家が嘔心吐血して著した著作は、作家個人ではなく、作家の属する時代を示すことが多し」、つまり、文学には自ずとその時代が表れると述べている（全集一巻、四一〇頁）。また絵画についても、画題のほか、筆墨、顔料といった物質的要素が時代と相関するだけでなく、「其の精神たる筆致、用墨、傅彩、意匠に至るまで一々時代の思想と相応し、文学其他、思想上の作品に於て理致を味う能力ある者は、移して以て絵画の如き手法によりて生ずる作品の精神にも通じ難からず」（全集一三巻、四九四頁）。つまり、文学や思想を理解できるならば、その同じ眼を以て絵画のなかに時代精神を読み取ることができる、というのである。

同様のことを、湖南の愛弟子・本田成之はより明確に述べている。

> 美術は他の文化と同じく其時代思潮の反映であると共に其の作者の全人格の表現である。言ひ換えると美術制作者は其の時代精神を端的に捉へて一世の人が表現を要求して已まぬ理想を表現するのである。……されば或る美術品を鑑賞するには其の民族思想の内容を知らなければ理解しがたいものである（「支那古代の画像」、『富岡鉄斎と南画』湯川弘文社、一九四三年）。

つまり、詩人や画家が自らの内面世界を含む森羅万象に対する了解を、その時の「心持ち」や「感興」とともに、図像や言語によって象徴的に表現したものが詩であり絵画である。そこには芸術家の技量に応じて時代精神が封じ込められることになる。逆に言えば、詩や絵画の鑑賞とは、それらを通して芸術家個人の技量と、そこに表現された時代精神を感じ取ることにほかならない。

しかも湖南の場合、上述の如く歴史の大勢を傍観者の目で冷静に捉え、かつまた認識対象を

歴史の内側から同情者の目を以て理解することができたのである。つまり上古から現代に至る各時代の時代精神は、すでに文献史料によって充分すぎるほど感得・理解していた。その湖南の目を以て、詩や絵画に臨めば、それらに封じ込められている時代精神を直観する(感じ取る)ことは、極めて容易であったに違いない。反対にまた、詩や絵画に対する深い理解が、湖南の文献理解を、さらには中国史全体の把握をより深化させたということも当然有り得たはずである。

いずれにせよ文献史料と芸術の双方において時代精神を把握することが可能であれば、たとえば絵画や詩に反映されている時代精神と同様に、象徴的なイメージ力を有する実見談や逸事のなかに時代精神を読み取ることは困難でなかったはずである。湖南はそのような象徴性を有する実見談や故事を選び出して、紀事本末体の歴史叙述のなかで効果的に利用して時代の雰囲気を浮かび上がらせようとしたのである。

つまるところ、湖南の歴史叙述を輝かせる象徴性やイメージ力は、中国通史を上古から現代に至る時代精神の変遷史として捉えることが可能であるほどの該博にして透徹した知識、さらに個別の文献史料と芸術に対する高度な理解と鑑賞力とが創り上げていたのである。あえて言えば、湖南にとっての歴史叙述とは、紀事本末体を全体の背景とする中に、象徴的なイメージ力に富んだ実見談や逸事を配して、あたかも一幅の絵画を描くように時代と人間を現出させることであった。

この故にこそ湖南は、清朝史学における歴史叙述の特色として、詩と歴史が結合すること、さらに歴史が芸術的文学的な表現になる傾向を肯定的に指摘したのである。たとえば『南宋雑事詩』(康熙年間の作品)について、以下の如く述べている。

> これらの種類の中に専ら歴史の事実に関するものを詩として書いたものがある。……元来は博覧を示す為めに作られたもので、考証といふものではないのであるが、面白いものである。材料は正史のみならず説部などからも採つていて、唯に歴史の逸事遺聞を詩によせて表す外に、歴史を詩として見る考へをもつて居るので、これらは実に支那人の特別な文化の産物と云つてよい。これを見れば、南宋時代の臨安の繁昌の有様が目前にみえるやうである(『支那史学史』三八三〜三八四頁)。

また、「乾隆以後は歴史や地理でも、一方では考証化すると共に、一方之を文学化する傾きがあり、これらの書は学問を芸術化する傾き」があったことを示している(同上、三八四頁)とも述べ、汪中の名篇「広陵対」について、「全く考拠と詞章とを合して一としたものであつて、その中に人物のことをのせ、山水のことを書くのでも、皆人を惹きつけるやうな美文を用いている。ここらが支那風の文化の結晶といふべきものであらう」(同上、三七九頁)と記している。

かつて湖南は、大正一〇年に発表された田中萃一郎の論文「支那学問研究法上の一特色(雪

橋詩話を読みて)」(『田中萃一郎史学文集』三田史学会、一九三二年）について、「あれくらい支那の学問に理解ある学者は専門学者にも珍しい」と述べて絶賛したことがあるという（「内藤先生とシナ古代史の研究三題」、前掲)。その田中論文によれば、清末の文人･楊鍾羲の著『雪橋詩話』とは、詩話の体裁によって書かれた野史で、「学術文芸に関する記事は勿論多く、朝儀制度、有識故実、百般のことにもわたつて論述してあつて、実に一篇是れ清朝の文化史である」(一一六頁)。同論文はまた、イギリスの史家ウアバンの「史学就中修史学は鑑賞的記述であって科学的記述はその任に非ず。即ち価値の絶対的理想的標準に照らして研究の結果として得たる史実に対し賢愚善悪美醜の批判を下すものである」という説を引き、「自然科学の欠点を補ふ可き哲学としての史学に於てはかくあらねばならぬのである。既に鑑賞的記述であるので修史学が一の文芸として目さる可きは当然のことである」(一二四頁）とも述べている。

湖南が田中論文を推奨したのは、「科学的研究の結果を韻語にて表現する支那学問研究上の一特色」を湖南もまた理解・吸収し、それを自らの方法ともして、研究成果を芸術的な面白さに高めて表現することを志向していたからに違いない。

以上、本章では湖南の表現論のうち象徴主義を取りあげた。湖南は、変化の思想や異文化理解に基づき把握した過去の時代の特質や人間の個性を、目に浮かぶが如く表現することを自らに課した。すなわち古代世界に没入することによって獲得した実感を、中国史学が最上の叙述スタイルとして生み出した紀事本末体で表現し、さらに絵画や詩と同様に強烈な象徴性や鮮明なイメージ力を持つ逸事や実見談を巧みに配することによって、象徴主義的な歴史叙述を実現していたのである。

おわりに

湖南史学の特徴を四章にわたって論じてきたが、それでは、こうした歴史家・湖南の学問全体は、いったいどのようにして形成されたのであろうか。この点について考えるため、いま一度、本稿で述べたことを簡略に見ておきたい。

まず第一章では対象論を取りあげて、生涯、経世意識を持ち続けた湖南が、自己ならびに研究法を含む日本中国の一切の存在を、認識・観察の対象としていたことを明らかにした。ついで第二章では史料論について考え、疑古の発想には富永仲基の影響が明確であることを改めて確認した。さらに釈古に関しては、史料に対する三種の立場を指摘した。すなわち、口頭伝承が文字記録化する状況に配慮したうえで、文献史料の価値を最大限に認めようとする立場（釈古の一)。次に、主観的一方的な史料は、事実の解明には無用であるが、当事者の価値観を読み取るための材料として用い、それによって「時代の雰囲気」を明らかにしようとする立場（釈古の二)。さらに、時代精神の把握に基づき直観によって史料価値を鑑別する立場（釈古の三）である。

つづいて第三章では認識論を取りあげ、湖南の歴史認識には、『史記』や『易』に見える循環の思想・仏教思想の諸行無常・西洋の社会進化論といった様々の変化の思想に照らして、認識対象を冷徹に観察する立場と、自らの目線を当事者の目線に重ねて熱く共感的に理解する異文化理解の立場とが齟齬なく並存していたことを明らかにした。最後に第四章では表現論のうち象徴主義について考え、芸術家の感性によって選び出したイメージ力を持つ逸事や実見談を紀事本末体の叙述のなかに巧みに配して、過去の時代の特質や人物の個性を目に浮かぶが如く表現する歴史叙述を実現していたことを論じた。

このように見てくると、湖南史学の特徴を根本的に規定していた要素として以下の諸点を挙げることができる。すなわち、終生保ち続けた経世意識。対象を冷徹かつ客観的に観察する変化の思想。対象の目線で対象を観察し、その内側から共感的同情的に理解しようとする異文化理解。対象世界と自己の内面をより良く表現することを弛まず研鑽する芸術家としての資質・執念。これらに加えて、中国史・日本史に関して、それぞれを時代精神の変遷史として捉えることが可能であるほどの深い理解。富永仲基や章学誠、司馬遷などといった日本中国の先学の学問（特に歴史学）の内容と方法論に関する該博な知識。さらに、そうした理解や知識を作り上げた飽くなき知的好奇心と学的向上心などである。

これらの諸要素こそが、後人の追随を許さぬ天才歴史家、内藤湖南の史学研究を支えていたのである。では、こうした要素を、湖南は如何にして獲得したのか。湖南に学ぶためには、この問題を避けることはできない。前稿では、極めて不充分ながら、変化の思想について論じた。本稿では最後に、対象を当事者の立場に立って内側から観察･理解する異文化理解の姿勢、すなわち上述の如く湖南史学の史料論（釈古の二）、認識論、さらに表現論にも関わる、この重要な特徴をどのように獲得したのかについて述べてみたい。

無論、このような一種漠然とした問題に対して十全かつ明快な解答を与えることは不可能ではあろう。しかし、ひるがえって考えるに、他者の立場で他者を理解するという能力（ものの見方）は、学問の研鑽によって獲得するというより、むしろ一個の人間として生きていく中で経験的に培われるものではなかろうか。しかもそれは、何不自由のない順境ではなく、逆境においてこそ、身につくことになるのではないか。

そうであるとすれば、全てを擲っての帰郷までも考えた青年期不遇時代の経験も重要であると思われる。さらに加えて、新聞記者時代に、政治外交を初めとする様々の事象に関して、その内情・内幕を目睹・伝聞した経歴も考慮すべきかも知れない。しかし、それらより湖南のものの見方に決定的な影響を与えたと考えられるのは、明治維新という時代そのものである。すなわち、この歴史の大きなうねりに直接巻き込まれた父親をはじめ周囲の人々の処世・運命・禍福を、言い換えれば外側だけからは容易には窺い知ることができない歴史との葛藤を抱えつつ生き、かつ死んでいった人々の一部始終を、聞き尽くし見尽くした結果、外面的な理解がいかに事柄の真相とかけ離れたものであるのか、また当事者でなければ、その行動は理解できな

いということを、まさに身を以て体得したと考えられるのである。

要するに、湖南が歴史の中の人間を内側から同情と共感をともなって見ることができたのは、賊軍の一戦士の子としての経歴からすれば、極めて当然なことであり、ある意味では必然的にそうせざるをえなかったのである。すなわち明治維新という時代の一大転換点に際会し、歴史の本流の行く先を見誤った南部藩は、官軍との戦いに敗れ賊軍となり果てたわけであるが、そこには、こうした表現だけでは到底括りきれない現実があった。しかも、以下の如く、湖南にとって極めて身近な人々が、歴史との葛藤劇を演じて見せたのであり、それを直接・間接に見聞する機会が少なくなかったのである。歴史は複雑であり、内側からの共感的理解によってのみ真の理解に到達するということを、幼年時代から痛感していたに違いない。以下には、雑誌『亜細亜』（『日本人』を改称）誌上において、湖南自らが記録・顕彰した、身近な五人の人物の処世を見てみたい。

○楢山佐渡　湖南が「故国に在て近世の偉人」と認め、父十湾から、事あるごとに涙を以て語り聞かせられた南部藩家老。維新に際して尊王と佐幕の間で二分していた藩論を、藩主の意をも押し切り佐幕方針によって統一し、秋田藩に攻め込んだが、結果として官軍に敗北する。藩主の命を受け官軍に謝罪することになるや、「事此こに至るは、天なり。余まさに一死以て一藩に代わらんとす」と述べ、身を挺して秋田城下に至り、情を陳べ誠を表す。かくて一切の責任を引き受けて刑死することになるが、「其の刑に就くや、頭地に墜つるも目は瞑せず。人皆これを異とす」。藩人からは、「古より英雄、誰か疵缺なからん。心いやしくも清潔なれば、深く責めるべきにはあらず」として、慕い続けられた。その後、明治憲法発布に伴う大赦によって名誉回復がなされ、家督再興が許される。その際、旧藩人が、旧藩の祖宗を祭る神社に建てた慰霊碑の刻銘「楢山佐渡之碑」全文を、湖南は採録・公表している（全集一巻、六〇一頁）。

○近内一人　湖南の叔父。俳諧を好み、剣術の達人であったが、戊辰の歳に「藩士出兵に際し主公素志を容れざるより岩手に於て割腹」、すなわち藩論が藩主の意と異なる佐幕へと決した際、藩主の無念を慮って戦争に先立つこと三月で自刃した。湖南は、その人物を知悉する父十湾が、本来、人並み以上の武功を立てるべきところを、「犬死にしたる」ことこそ口惜しけれ、とたびたび述懐していたことを記し、あわせて、その凄絶な辞世「ここちよや涼風かよふ腹のわた」を録している（同上、五七八頁）。

○熊谷直興　父の最も親しい友人で、戊辰の役、戦死者の一人。藩論が佐幕に傾いた時、上書して諫めるも、全く顧みられず。戊辰戦に出陣して戦死。明治十三・四年の頃、その手稿が発見されると、父の命により写し取った湖南は、「少時なれど、為めに感涙を催したりき」（同上、五八〇頁）と記している。

○内藤十湾　若い頃から尊王派であった父親の十湾は、南部藩の佐幕方針のもと戊辰の戦乱に参加して命は長らえるが、いわば賊軍の生き残りとしての「こだわり」を抱えながら、余

生を送ることになった。十湾のそうした心境をうかがわせる材料として、戊辰戦死者二十三年祭の時に作った祭文が、湖南の手によって全文記録されている。その中に「予初め陣に出るや生て還らざるを誓ふ而して今茲に在り碌々一事の為すなく二十三年の長歳月を空過し霜鬢已に皤々（はは）たり是れ幸に似て実は不幸愧つ可きの大なるもの……噫諸君砕けて玉となり、余輩全くして瓦に帰す、其の栄辱果たして如何ぞや」（同上、五八〇頁）との一文が見え、心ならずも玉となって砕け散った諸友の霊を祭る十湾の気持ちが伝わってくる。当時、父からの書信で慰霊祭の様子を知らされた湖南は、「大人の祭文にて人皆落涙せりとは極めて高尚厳粛なる出来事にて家伝に特筆すべきもの也」と、返信に書き記している（全集一四巻、三八二頁）。

○奈良養斎　楢山の佐幕方針に義を以て反対した無名の勤王論者。大坂藩邸で財政改革に当たるという役目柄、京阪の間にあり、頗る天下の形勢に観る所があった。その結果、「天子の親政にあらざれば竟に治むべからざるに至らん」、「将軍家已に頼むべからず、時勢艱難且つ偏陲に在るも策を建てて決行せば、古楠氏に譲らざる道なきにあらず」といった持論を唱えて、藩論を勤王に導くべく努力するも、一切の献策が容れられなかった。微賤に起こり顕職に至ったこと、ならびに剛果にして権貴も避けぬ人物であったため、失脚と復帰を繰り返したが、一貫して勤王を唱える。楢山氏破れて後、ようやく、その見識が認められるも、明治五年に老死する（全集一巻、六〇五頁）。

これら五人の複雑多様な処世を一瞥するだけで理解できるように、明治維新という大きな歴史の分岐点に余儀なく立たされた南部藩士達の生き方は、賊軍の語を以ては到底括りきれない。湖南は成長するにつれ、このことを、まさに涙しつつ追体験的に理解していった。すなわち、藩主の意に悖る苦渋の選択を行うも、事破れるや、いさぎよく一命を以て責めを塞ぎ、その「清潔」さを慕われた国老・楢山氏以外に、藩論の佐幕とは異なる勤王の志を持った人々の様々な処世の内奥を理解できるようになっていったのである。

冷静客観的な立場から見るならば、彼等はあくまで賊軍の士でしかない。しかし内心には勤王の志を抱き、状況に応じて、それぞれの生き方を貫いた。佐幕方針が決まるや、藩主の意を慮って自刃した者。藩論に反対を唱えながらも出陣して見事に戦死した者。藩論とは異なる本心を秘めつつ出陣して幸か不幸か生き延びた者。潜運黙移を把握して藩論とは異なる意見を唱え続けて老死した者。楢山を含め、彼らの真意は、彼らの境遇に自らを置いて忖度するのでなければ到底理解できない。人間の生き様は、外側からの観察では理解できず、内面に立ち入って共感的に理解しなければ、すなわち「設身処地」の観点に立たなければ分からないということを、明治二五年前後の青年湖南が『亜細亜』誌上で訴えたのである。

こうした賊軍・南部藩士の生き残りとしての十湾を父親に持つ湖南の「こだわり」は、おそらく一生継続の間、抱き続けられた。とりわけ青年時代には、敗者としての「こだわり」をしばしば公言している。たとえば、「三河に別る」と題する文章では、「余は薩長といふ者を眼中に置かざらんことを以て、平生自ら勉むれども、猶ほ余が弱き心は、同じく失敗者たりし当年

の所謂佐幕地方人士に同情の感を懐き、相憐むの念なきを得ず、三河が偉人崛起の地にして、今日の形勢に在るを見れば、之が為に泣くべきもの、豈に余が郷国と隔離あらんや」（全集一巻、五三二頁）と本心を語り、さらに「事ふる所に忠」（同上、五二六頁）でも、勤王と佐幕は単純に二分すべきではなく、そもそも幕府は王命を受けて天下に号令するのであるから、幕府に忠なるは、同時に天朝にも忠なることであるはずである。しかるに、官軍と賊軍の区別は、薩長の胸先三寸で決まっているとし、「近世の史冊を作る者を看よ、其勝つ者に媚び、其敗るる者を誣ひ、幾多の真摯なる忠臣義士をして、恨を黄泉に呑ましむ、吾等素より之を悪む」（同上、五二六頁）との不満を漏らしている。

また「緇心録」なる文章でも、「九州人の善く歌ふ鄙謡を聞くに、淫猥にして聴くに堪ふべからず、此等が戦勝者として、大都に入り込み、風を移し俗を易へたれば、さる粋人共が、明治の世になりて歌妓の芸いたく衰へて、容姿のみにて售るるやうなり行きしと歎くも故なきにあらず」（同上、四二三頁）と、勝者に対し手厳しい批判を加えている。

以上は青年時代の文章であるが、湖南五七才の時の文章「維新史の資料に就て」（全集七巻）においてもなお、同様の「こだわり」を見ることができる。この一文は、維新史料編纂局による史料収集の方針が偏向していることを指摘して、勝利を占めた側の記録だけではなく、敗者の材料を集めるべきことを唱えている。すなわち「一時の順逆などといふ考へは、神聖な史実の前には極めて微弱である」として、客観的収集の必要性を強調している。しかし、同じその文章で、元治元年の騒動（禁門の変）において服罪した長州の三家老は、「当時の順逆からいへば明らかに賊名を受くべきもので、而かもその服罪の仕方は維新の際の東北諸藩の家老と同様であるにかかわらず、これ等の人々は既に贈位の恩典に浴して居る。維新の際勝利者が便宜の為にした一時の処置は、別に今日から咎める必要はないけれども……其の薩長であると反薩長であるとを問はず同一の待遇を与へるべきであると思ふ」と記している。「取るに足らない順逆論」を、当の湖南自らが繰り返しており、「こだわり」の深さを思い知らされる。

敗者に対する「こだわり」は、湖南をして、「敗」なる題名をつけた短文まで書かしめている。曰く、「宿志蹉跎、功名望絶ち、到る処俗眼に白まれ、窮して路頭に倒れ、烏鳶蚊虻に好身手を餌し去る、亦た風流に非ずといはんや。時に抜くの言用いられず、世に超ゆるの才人の知るなく、怨憤狂発、頸を断ち脰を断ち、新聞屋に笑はれて已む、亦た風流に非ずといはんや。敗か、箇の一字、自から無量の趣味あり」（全集一巻、六七七頁）、と。自らの不遇を託（かこ）つと同時に、敗に対して「無量の趣味」を感ずる、すなわち敗を敗者の立場で理解できると記しているのである。前述の如く、清末光緒帝の運命が、「数百年積重の勢に圧せられ」て亡んでいった崇禎帝やルイ十六世と似ていることを見て、「感傷殊に深し」と記したのも、やはり敗者に即して敗者を理解しようとする眼差しによる観察の結果であると言えよう。

こうした、官軍と賊軍、勝者と敗者に対する「こだわり」の強さは、湖南がまさに賊軍や敗者の内面に目を向け、彼等の視点に立って、内側から彼等を理解していたことを物語る。さら

に、この「こだわり」こそが、湖南をしてあらゆる認識対象を、その内面において理解するように迫ったのである。湖南が歴史に対して、傍観者として冷徹に見る目と齟齬することなく、当事者として熱く見る目を持っていたことは指摘したが、以上の如く、そうした異文化理解のものの見方は、江戸から明治に至る歴史の大勢こそが湖南をして余儀なく持たせたのである。

本稿では、湖南史学の特徴と形成を主題として論じてきたが、とりわけ形成に関しては、なお論ずべきことが山積している。本稿で分析した湖南史学の特徴を、可能な範囲で吸収することに努める一方、湖南史学の形成については、別の観点からさらなる考察を行いたいと考えている。